みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Indigenous Social Relations in a Contemporary Canadian Inuit Society : A Case Study from Pelly Bay, Northwest Territories, Canada

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岸上, 伸啓, スチュアート, ヘンリ
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004199

現代ネツリック・イヌイット社会における社会関係について

——カナダ国北西準州ペリーベイ村の事例を中心に——

岸　上　伸　啓*，スチュアート　ヘンリ**

Indigenous Social Relations in a Contemporary Canadian Inuit Society: A Case Study from Pelly Bay, Northwest Territories, Canada

Nobuhiro KISHIGAMI, Henry STEWART

Ethnographical and archaeological research concerning the Netsilik Inuit has been conducted in Pelly Bay, an Inuit settlement located in the Canadian Central Arctic, and its environs since 1975 (project director: H. Stewart). This paper is a report of a portion of the social anthropological research results.

Here, we describe indigenous social relations in a contemporary Inuit society in the 1990's. We delineate and analyse the role of social relations in subsistence activities, food sharing practices, and settlement politics. Furthermore, we consider some aspects of social change and continuity among the Inuit. Our findings are summarized below.

1. In September 1992, the population of Pelly Bay was 393 persons, living in 69 households.

2. Sixty households (87%) were composed of nuclear families, and 9 households (13%) were made up of extended families. Household composition was either a form of the extended family, or that of a nuclear family, depending on the stage of familial development. Recently however, a trend toward nuclearization may be observed.

3. There were 10 extended families, of which 4 and 2 respectively

* 北海道教育大学，国立民族学博物館研究協力者
** 目白学園女子短期大学，国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Inuit, social organization, kinship, family and kindred, social change, sharing, cooperation, local politics
キーワード：イヌイット，社会組織，親族関係，家族とキンドレッド，社会変化，シェアリング，共同，地域政治

share separate but common ancestral ties (Diagram 1).

4. There were 63 married couples. Seven marriages (11.1%) are between consanguineously related kinsmen, and of those 5 between cousins. However, we found that there is an ever increasing tendency to avoid marriages between consanguineously related kinsmen.

5. There is no definite rule concerning post-marital residential pattern, although a slight tendency toward patrilocality or virilocality may be observed. However, a majority of newly married couples are inclined to establish independent households after living for a time in households of one of the spouse's parents.

6. It is known that several forms of quasi-kinship and partnership relations were well developed in the 'traditional' Netsilik society. However, most of these relationships have disappeared, or are losing importance. At present, only adoptive relations, namesake relations, and in-law avoidance relations may be observed. We observed that peer, or friendship relations, are becoming ever more important among the young.

7. Generally, the size of hunting and fishing groups has become smaller as a result of the use of rifles, snowmobiles, boats with outboard engines, etc. However, our study shows that a majority of harvesting activities, such as summer sealing, summer and winter caribou hunting, wolf, polar bear and musk-ox hunting, and berry picking are carried out cooperatively, not only by members of a single household, but also by members of extended families living in separate households, or by special partners such as namesake persons.

8. Our research shows that food sharing, food gifts, and mutual assistance are most frequently practised among members of a restricted extended family, such as parents-children, siblings, grandparents-grandchildren. Next in frequency is co-operation among members of an extended family, such as uncles-aunts, nephews-nieces, and cousins. We argue that food sharing and mutual assistance are still practised frequently among members of an extended family in the contemporary Pelly Bay society.

9. We think that there is possibly a correlation between hamlet internal politics and the size of extended families. Hamlet counsellors and the mayor tend to elected as representatives of certain extended families. More detailed research is required concerning the internal politics.

10. It is true that individual households, the nuclear family and individuals have come to play the role of basic units in some contemporary social and economic contexts. However, our research shows that extend-

ed family relations in the settlement still function in several contexts, such as harvesting activities, food sharing, mutual assistance, and hamlet politics.

11. We admit that social change is occurring among the Pelly Bay Inuit. However, we argue that the socio-economic significance of the extended family has not been drastically altered, even in the context of rapidly changing circumstances, both internal and external to the community. Our research shows that the contemporary Netsilik Inuit still use extended family relations to organise social, economic and political activities.

1. はじめに
2. 調査地の概況とデータの収集
3. 現代のペリーベイ村の生業および経済活動
（1）賃金労働
（2）狩猟・漁撈活動
4. 1992年のペリーベイ村の社会関係
（1）1992年の世帯と家族
（2）村の親族関係
（3）親族呼称の体系
（4）婚姻と居住形態
（5）擬似親族関係
（6）自発的パートナー関係
5. 狩猟漁撈活動と社会関係
（1）春の海氷上でのアザラシ猟
（2）夏の沖合アザラシ猟
（3）夏のカリブー猟
（4）夏のコケモモづみ
（5）冬のカリブー猟
（6）冬のオオカミ猟
（7）冬のホッキョクグマ猟
（8）冬のジャコウウシ猟
（9）春のカリブー猟
（10）分析
6. 食物の分配と相互扶助
（1）世帯主 21-A の昼食と夕食（1992.8.22～9.23）
（2）食物の贈与
（3）仕事の相互扶助
（4）分析
7. 村内政治と拡大家族関係
（1）村長の選出
（2）村議会議員の選出
（3）委員会や組合の長の選出
（4）分析
8. 変化と持続
9. 結　語

1. はじめに

フランツ・ボアズ（Franz Boas）による1883–1884年のバフィン島（Baffin Island）における人類学的調査を極北[1] 人類学の出発点と考えるならば，極北人類学は百年以

1）地理学的区分される北緯66度33分以北の「北極圏」と区別して，樹木限界以北のツンドラ地帯を極北と呼ぶ。

上の歴史をもつことになる。ボアズの研究以降のこの分野における研究の中心課題は，社会と環境との間にみられる生態学的関係の解明であったということができる [e. g. Boas 1888; Mauss 1906 (1981); Heinrich 1963; Damas 1963, 1969b; Balikci 1964; Wenzel 1981; Freeman (ed.) 1976; Condon 1983; Smith 1984, 1991]。

ところで，カナダ・イヌイット社会の親族関係や社会組織についての研究の歴史もボアズにはじまるとみてよい[2]。ボアズは，カナダのバフィン島イヌイット社会における社会の構成原理として，血縁および姻族関係の重要性を指摘した [Boas 1888: 578]。その後，スパイアは，「エスキモー型」の親族用語体系を定立させるとともに，イヌイット社会における核家族の社会経済的重要性を指摘した [Spier 1925]。さらにマードックは，この成果を理論的に整理し，「エスキモー型の社会組織」という概念を提起するに至った [Murdock 1949]。

1950年代から1960年代にかけて極北地域の多数の村落で行なわれた現地調査の目的の一つは，マードックが提起した「エスキモー型の社会組織」が汎極北的に存在しているか否かを検証することであった。ところが，一連の現地調査の結果，マードックの概念は，コパー（Copper）イヌイット以外のイヌイットやユッピック[3] 社会には必ずしも妥当しないことが判明した [Giddings 1952; Hughes 1958; Damas 1963 など]。また，それらの調査の結果，イヌイット社会やユッピック社会の地域的多様性や社会構造の特徴なども判明した [Damas 1969a, 1969b; Burch 1975など]。ところが社会構造や組織についての研究が1960年代の後半に入り下火になり，1970年代に入ると極北地域での文化および社会人類学的研究はあまり活発ではなくなった。

第二次世界大戦以降，特にイヌイットやユッピックが定住生活を開始した1960年代以降，極北の先住民[4] は物質および文化の面で大変化を体験した。1980年代から1990年代にかけて，クラウスナーら [Klausner and Foulks 1982] やジョルゲンセン [Jorgensen 1990] は，アラスカの極北地域での油田開発やアルコール消費が先住民社会に及ぼした影響を研究し，社会階級（社会階層）が出現しつつあること，社会が世界経済システムの一部として取り込まれつつあることなど，アラスカ極北地域のイ

2）詳しくは，岸上 [1990a] を参照されたい。

3）「エスキモー」と呼ばれてきた集団は，言語，アイデンティティーなどを異にする2つ以上のグループに分かれる。一つは，南西アラスカ，セント・ローレンス島，チュクチ半島に分布するユッピック（Yup'ik）であり，もう一つは北アラスカからカナダ，グリーンランドまで分布するイヌイット（Inuit）である。詳しくはスチュアート [1993b] を参照されたい。ただし，その論文に「ユイット」としたのをここで「ユッピック」と改める。

4）ここで，「先住民族」を特定の民族集団の意味で使い，「先住民」は先住民族全体やその概念を論じる場合に使う。

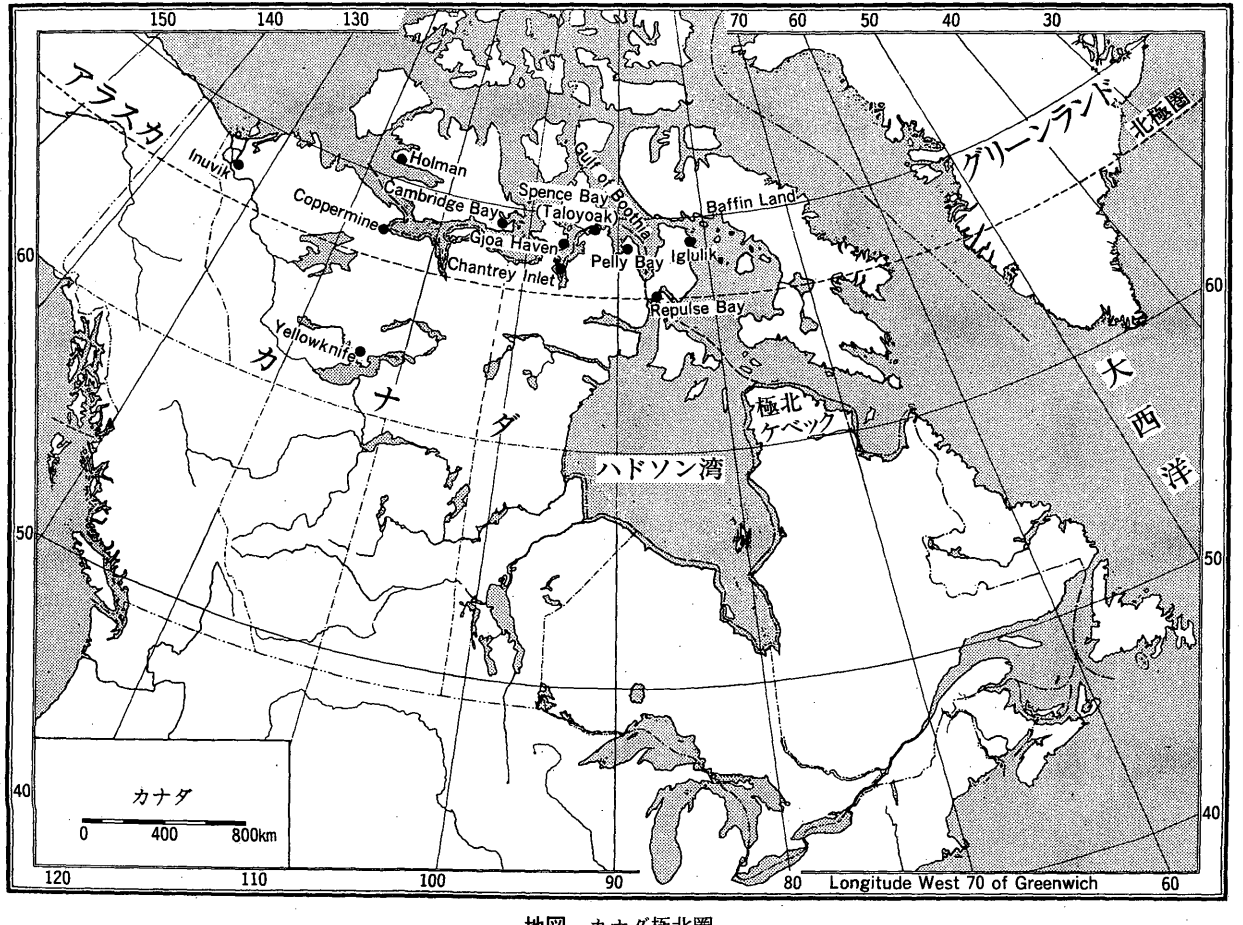
ヌイットやユッピック社会の構造的変化を指摘してきた。

人類学的な研究の焦点が1980年代に入り，生業とそのイデオロギーに移って，注目すべき研究が出版された。それは，アラスカ・ユッピックに関するフィエナップ＝リオーダンの民族誌研究である [FIENUP-RIORDAN 1983]。彼女は，ユッピックの世界観を構造論的に全体として把握し，現在でも生業とそのイデオロギーはネルソン（Nelson）島のユッピックの日常生活において重要性を持ち続けている点を強調している。また，1990年代に入ってからは，ナタルのグリーンランドを舞台とした総合的な社会人類学的研究 [NUTTALL 1992] と，アザラシ捕獲反対運動がイヌイットの社会と経済へ及ぼした影響に関するウェンゼルの研究 [WENZEL 1991] が公刊された。これらの研究も，少なくとも1980年代まではアザラシ猟や食物の分配が，社会的にも経済的にも重要であり続けてきたことを指摘している。ただし，ウェンゼルは，アザラシ捕獲反対運動のため1980年代後半ころからカナダ・イヌイットは未だかつてない程の社会経済的な危機に直面していると指摘している。これは，カナダ・イヌイット社会が世界経済システムに連結されている結果である。

フィエナップ＝リオーダンやナタル，ウェンゼルらが，視点のちがいはあれ，極北先住民社会の文化的連続性の方に力点を置いているのに対し，ジョルゲンセンは現代の極北アラスカの先住民社会における経済構造と社会構造の間にみられる矛盾を指摘している。ウェンゼルもまたアザラシ捕獲反対運動（毛皮の不買運動）がこのまま続くようなことがあれば，イヌイットはこれまでのように生業活動を続けることができなくなり，ひいては食物分配の制度や社会関係も大きく変化する可能性を示唆している。

このような変動研究が行なわれているにもかかわらず，1990年代のカナダ・イヌイット社会に焦点を合わせた村落研究（community study）は，近年ほとんど行なわれていないのが現状である。すなわち1990年代のイヌイット社会は，1960年代のイヌイット社会と比較すると物質的な面や文化的な面で大きく変化してきているが，1990年代のイヌイット社会がどのように組織されかつ機能しているかはほとんど研究されていないのである。

本論文では，1990年代のカナダ・イヌイットの社会関係について記述するとともに，その社会関係が生業活動，食物分配や村内政治において果たしている役割を記述し，分析をする。さらに社会関係の変化と持続に関して若干の考察を加える。


アラスカ
グリーンランド
北極圏
カナダ
大西洋
ハドソン湾
極北ケベック
Inuvik
Holman
Coppermine
Cambridge Bay
Spence Bay (Taloyoak)
Gulf of Boothia
Baffin Land
Gjoa Haven
Chantrey Inlet
Pelly Bay
Iglulik
Repulse Bay
Yellowknife
カナダ
0 400 800km
Longitude West 70 of Greenwich
150 140 130 70 60 50 40 30
120 110 100 90 80 60
60 50 40

地図　カナダ極北圏

2. 調査地の概況とデータの収集

本研究のためのデータ収集は，筆者の一人（スチュアート）を代表者とする民族・考古学研究ペリーベイ・プロジェクトの一環として，カナダの北西準州ペリーベイ村（Pelly Bay，イヌイット名Arviligjuak）において主に1990年の3月から4月にかけての5週間，1991年8月から9月にかけての7週間，および1992年6月から9月にかけての8週間，合計20週間の間に行なわれた。この期間中に，世帯構成，世帯主間の関係，その時期の狩猟漁撈活動とその活動集団構成，食物分配に関する情報を観察と聞き取りをもとに収集した。このテーマについての調査期間は短く，サンプルも少ないが，ここでの観察結果や分析は，ほかの期間の活動やほかのサンプルにもほぼ当てはまると考えている。

ペリーベイ村は，北緯68度32分，西経89度49分に位置し，カナダ中部極北圏にある。この地域の一年は，典型的な極北ツンドラ気候であり，長く寒い冬と短く涼しい夏によって特徴づけられる。

ペリーベイ地域を主要な生活領域としてきたイヌイットは，ネツリック・イヌイット[5]として知られ，ラスムッセン [Rasmussen 1931] やバリクシ [Balikci 1964,1989] らによって人類学的調査が行なわれ，比較的詳細な民族誌や映像フィルムが残されている。

1990年の調査では，村にあるすべてのイヌイットの世帯を訪ね，世帯構成を調査した。さらに世帯主間の関係を村民の複数のインフォーマントに聞き，世帯主間の親族関係を確認した。筆者の一人（岸上）が5週間生活をともにした世帯とその世帯主が属する拡大家族の社会・経済的な活動や相互作用を観察することにより，村内の拡大家族成員間や世帯主間での活動内容について情報を収集した [岸上　1991]。食物分配の調査に重点を置きながら，同様の調査を1991年，1992年と1994年にも行なった。

5) ペリーベイ村に住むネツリック・イヌイットは，カナダの中部極北圏に分布するセントラル（中部極北圏）イヌイットの民族的集合（ethnic aggregate）の一つである。ことば（いわゆる方言）のわずかな違いによって，ネツリック・イヌイットが伝統的に10の地域集団（local groups），すなわち Arviqtuurmiut, Killirmiut, Natsilingmiut, Qiqiqtarmiut, Kuungmiut, Ililirmiut, Utkuhikhalingmiut, Uvaliarlit, Hanningayurmiut, そして調査地域であるペリーベイ周辺の Arviligyuarmiut に分れると認識されている [Balikci 1984: 415–416]。本論では，ペリーベイ村で定住している集団を便宜的にネツリック・イヌイットと呼ぶことにする。

3. 現代のペリーベイ村の生業および経済活動

この100年ぐらいの間に，西欧社会との接触の結果，ネツリック・イヌイットの生活は大きな変貌を遂げた。特に，キリスト教の受容，定住化そして経済構造が生業中心経済から生業＝貨幣経済へと移行した結果，イヌイットの社会は外部の市場経済システムに接合されてきた。1990年の時点におけるペリーベイ村に住むネツリック・イヌイットの経済構造は，次に示す通りである。

(1) 賃金労働

現代のイヌイット社会では，食料を得るための狩猟および漁撈活動を行なうのに，スノーモービル，船外機付きボート，ライフルなどを利用しているので，ライフルの弾薬やガソリンを購入しなければならない。すなわち，現代のイヌイット社会では生きていくために現金収入が不可欠である。だが，村内での定職の絶対数が少ないため，村民のうち何人かは連邦および準州政府支出の生活補助金や福祉金に依存せざるを得ないのが実状である。

1990年3月末現在，村内には，イヌイットが就くことのできる次のような40あまりの定職がある。村役場には，村長1，役人（助役，会計係，秘書など）7，運転士（軽油や水の配給車，ゴミ収集車）6，および機械工1の計15の職のほかに，住宅組合には，会計1，秘書1および修理工4の計6の職がある。学校には，秘書1，用務員1，カウンセラー1および教務補助員3の計6つの職がある。ただし教務補助員は，その年の予算の都合によって2人になったり3人になったりする。生活協同組合[6]には，総支配人，副支配人，店員や会計係，ホテルのコックなど5つの職がある。ただし，総支配人はヨーロッパ系カナダ人である。また，生協は少数ではあるが常時何人かのパートタイムの人を雇っている。狩猟者・罠猟師協会には，秘書1の職があった。そのほかは，北西準州によって雇われている役人2名，発電所の作業員1名，空港関係者（天候予報官1名，作業員1名）2名，看護所の通訳2名と郵便局1名などの職もある。

このほかに北西準州政府の代議員1名や腕のよい彫刻家が約4名村内にいる。また，

6) ケベック州の極北圏で1959年にはじまった生活協同組合運動が1960年代に各地へ広がり，現在，多くの村には組合がある。手工芸品を「南」の市場に販売する一方，食料，衣料をはじめ，狩猟・漁撈用具，金物，家具などを村の店で販売するとともに，その利益を運営して養老年金などの福祉サービスにも乗り出している。

極北圏内にある油田や鉱山に2ヵ月を単位として出稼ぎに出る青年や中年が2〜3名ほどいた。年によって規模が異なるが，夏から秋にかけては，道路の整備や家屋の建築のための季節労働の仕事が複数ある。以上のように，多く見積もっても常時現金収入を得ることのできる仕事の数は，出稼ぎなどを除けば，50にも満たず，村の総世帯数である69世帯よりも少ない。

賃金労働に就いている者は，平日は村内で仕事をし，週末や長期・短期休暇中に狩猟や漁撈に従事するパターンが一般的である。一方，定職に就いていない村民は，連邦および準州政府支出の福祉金や生活補助金に頼る一方，ホッキョクグマの毛皮やオオカミの毛皮を売ったり，セイウチの牙の彫刻品の制作・販売によって現金を手に入れ，それらの金を利用して狩猟や漁撈を続けている。日常の食事の中で，村外から運びこまれてくる食料品の割合は年々増加しているように思われるが，主食は依然としてカリブーの肉，アザラシの肉やホッキョクイワナである。

(2) 狩猟・漁撈活動

現代のネツリック・イヌイットの中心的な生業活動は，カリブー猟，ワモンアザラシとアゴヒゲアザラシ猟およびホッキョクイワナ漁であるが，ほかにも10数種に及ぶ海獣，陸獣，魚類や鳥類をライフルや漁網を利用して捕獲している。1960年代にはじまった定住や狩猟漁撈活動の機械化のために，獲物の種類やその比重に変化がみられた [スチュアート　1992a: 77, 1995]。

陸獣としては，カリブーやジャコウウシを食料として捕り，ホッキョクグマやオオカミは主に現金収入源としての毛皮をとるために捕獲している。

カリブーはほぼ1年中ペリーベイの周辺で捕ることができるが，猟の最盛期は8月から翌年の6月末にかけてである。カリブーの肉はワモンアザラシの肉やホッキョクイワナとともにイヌイットの主な食料となっている。秋には小型4輪駆動のバギーを利用して，冬や初春にはスノーモービルを利用して日帰りのライフル猟を行なっている。また，夏には小型ボートでペリー湾の対岸に渡り，カリブー猟を行なうこともある。

ホッキョクグマは12月1日から翌年の5月末までが，北西準州の設定した猟期であるが，その最盛期は12月と3〜4月である。ホッキョクグマは保護獣であるためペリーベイ村に対する捕獲割り当ては1年につき15頭である（1990年当時)。ホッキョクグマ猟を行なうためには，ブーシア（Boothia）湾あたりまで北上することが多く，2〜3日の日数を必要とする。一人でホッキョクグマ猟に行くこともあるが，2〜3人の

チームを組んで狩猟に行くことが多い。ホッキョクグマの肉は食料となるのみならず，その毛皮を1枚につき1,500～3,000ドルで毛皮業者に売ることができる。

ジャコウウシの狩猟解禁期間は10月1日から翌年の4月30日までであるが，本格的な猟は11～12月および4月に行なわれる。ジャコウウシのペリーベイ村に割り当てられている捕獲数は年間5頭である。ジャコウウシの生息域はジョー・ヘブン（Gjoa Haven）周辺であり，そこで狩猟を行なうためには最低一週間の日数を必要とする。通常，3人以上で狩猟に行く。

オオカミの肉は，1950年代以降，食用にならなくなった。その毛皮は良質の場合，1頭あたり約300～500ドルで売れるため，3～4月には多数のハンターがオオカミ猟に従事する。村の周辺でスノーモービルを利用して日帰りのライフル猟を一人で行なうことが多いが，2～3人でチームを編成し，2～3日の狩猟旅行に行くこともある。

海獣としては，ペリーベイ村のイヌイットは，ワモンアザラシ，アゴヒゲアザラシ，イッカククジラやシロイルカを捕獲している。

ワモンアザラシは，定住生活を開始する以前からネツリック・イヌイットにとっては特に重要な獲物であった。ライフルが恒常的に使用される以前は，12月から3月にかけてのもっとも重要な食料源であったが，現在では厳寒期の1月や2月には大半の村人がワモンアザラシ猟を行なわなくなった。狩猟方法も，ライフルが普及した1940年代に，呼吸穴を利用したものから，定着氷縁[7]からのアザラシ猟に変化した[Balikci 1964: 93]。現在，多数の村人が定着氷縁でのアザラシ猟に従事するのは，11～12月および4～6月の間である。5～6月にはペリーベイ村の人々は2～4週間の春キャンプをし，海氷上で日光浴をするアザラシをライフルで撃ちとる方法や，呼吸穴で銛によるアザラシ猟を行なう。4～5月には海氷上の巣穴にいる子アザラシ猟を主に行なっている。7月から9月にかけての夏場には，回遊するアザラシを小型ボートからライフルで仕留める。

アゴヒゲアザラシはワモンアザラシよりもはるかに大きく，夏場に海上で船外機付きのボートからライフルによる狩猟で捕獲する。その最盛期は9月である。

ペリーベイ湾の入口付近で9月にはイッカククジラやシロイルカ猟が行なわれることもある。イッカククジラのペリーベイ村に対する捕獲割り当て数は，1年当たり10頭である。しかしながらイッカククジラやシロイルカは近年あまり現われないため，狩猟されていない。

7）定着氷は，海岸に固定している海氷で，沖合へ数100キロにも延びる場合がある。沖合側の縁から回遊するアザラシをねらう狩猟を floe-edge hunting という。

ペリーベイ村周辺の河川ではホッキョクイワナが春に川を下って海に出，秋には川を上って，越冬のため湖へと向う。このホッキョクイワナの主な漁期は4月半ばすぎから11月末にかけてである [スチュアート　1992b, 1993a] が，最盛期は9月末から11月末にかけての河氷上の漁である。特に10月初旬から11月中旬にかけて，川の中流や湖で大量のホッキョクイワナを捕獲し，河氷で作った氷箱（1.5×1.5×1.5 m）の中に一部を貯蔵し，冬や春の食料とする。

ペリーベイ村のイヌイットにとって鳥類は中心的な食料ではないが，初春から夏にかけてライチョウ，ガンやケワタガモを村の周辺で捕ることができる。それらの肉は，単調な食生活に彩りを加えるものとして村人に珍重されている。

イヌイットを研究している多くの人類学者にとって，生業はカナダ・イヌイットのもっとも関心のある活動であり[8]，イヌイット社会の社会・文化的な基盤を形成していると考えている [e. g. Fienup-Riordan 1983; Freeman 1984; Wenzel 1981; スチュアート　1995]。しかし，狩猟，漁撈活動を行なうためには，ガソリンやライフルの弾やキャンプ用食料などを購入したり，スノーモービルや小型ボートや船外機を購入し，維持，補修するのに現金が必要である。ペリーベイ村のイヌイットは，ほかのカナダ・イヌイットと同様，仕事で得た金や政府の補助金を生業活動のために使用している。生業活動自体は，経済的観点からのみみるとかならずしも効率的とはいえないが [スチュアート　1993a: 31–32]，やりがいや充実感 [スチュアート　1993a: 32]，彼らの欲しい食料を獲得できることや社会関係の維持 [Wenzel 1991] の点からみると，今なお文化社会的に重要な活動であるといえる。また，スチュアートは，現在のペリーベイ村の生業活動では，集約捕獲に基づく短時間の効率的な狩猟と漁撈が主流になっていると指摘している [スチュアート　1992a: 78]。

4. 1992年のペリーベイ村の社会関係

ここでは，現在のペリーベイ村でみられる世帯，家族関係，村の中の親族関係，婚姻と居住形態，養子縁組，同名者やそのほかのパートナーシップについて報告する。

8) フリーマンは，カナダ，アラスカやグリーンランドの極北先住民社会では，大半の成人男子が自らを狩猟者であると考えていると指摘している [Freeman 1988: 150]。しかし，現在のカナダのイヌイット社会やアラスカのユッピック社会では，成人と青年との間には，生業活動や職業について考え方に違いが存在していることも事実である [Condon 1987, 1990: 273–275; Chance 1984: 656]。従って，イヌイットのすべての男性の最大の関心事が狩猟活動に限られるとはいえない。

(1) 1992年の世帯と家族

1992年9月20日時点におけるペリーベイ村のイヌイットの世帯総数は69であり，イヌイットの人口は393名であった。この人数には，イエローナイフ市で就学中の高校生やほかの村に一時的に滞在している者は含まれていない。世帯あたりの平均員数は5.7人である[9]。

ペリーベイ村の世帯は，構成員数からみると，2人世帯から11人世帯までかなりの偏差があるが，6人世帯が16ともっとも多い。それに続くのが5人世帯の14，3人世帯と7人世帯がそれぞれ9ずつ，4人世帯の7，8人世帯の6，9人世帯の3，2人世帯と10人世帯がそれぞれ2ずつ，11人世帯が1である。

構成内容から69世帯をみると，60世帯（全体の約87%）は核家族から構成されており，9世帯（全体の約13%）は2世代ないしは3世代の成員を含む拡大家族世帯である。各世帯の構成を表1に示す。

ほぼ50歳以上の世帯主の場合は，結婚したばかりの息子か娘の夫婦と同居している場合が多い（世帯6，7，9，25，29，45，51，52，53）。しかし入居しうる空き家が村内にあり，かつ家賃を支払うだけの収入があるなどの条件が整うと，同居していた若夫婦は新居を構える傾向がある。なお，世帯27は，成員の死亡により，一時的に他世帯に寄宿している事例（一時的な拡大家族世帯）である。ペリーベイ村には，死者が出た場合，住んでいた家屋を変える慣習がある。世帯27は息子が死んだため，その父ともう一人の息子が結婚している娘の世帯に一時的に寄宿している。別に入居可能な家屋が見つかれば，この父は未婚の子供たちと再び単独の世帯を形成することを計画している。

先に述べた60の核家族世帯のうちの47世帯は，夫婦と未婚の子供たちからなる典型的な核家族から構成されている。残りの13世帯は，変形の核家族世帯である。世帯56と57は，死者が出たため死者の弟1名ずつ（56-A と 57-A のオイにあたる人）を一時的に寄宿させており，世帯11は父の死亡で世帯が解体し住むところのなくなった青年がイトコのところに寄宿している。また，世帯14，19，33，34，66，67の6世帯は，世帯主の未婚の弟や妹，義理の弟やマゴを含む核家族世帯である。世帯2，63と65は，前の結婚の時の子を連れた男女が結婚し，世帯を構成している事例である。世帯13は，

9) ペリーベイの村役場の記録によると，イヌイット人口は410名余りとのことであった。これ以外に，ヨーロッパ系カナダ人の学校の教員6名，生協のマネージャー1名，看護婦2名とその人たちの家族がペリーベイ村に住んでいる。

未婚の兄と妹が世帯を構成している事例である。

世帯構成は，家族の発達サイクル（developmental cycle）によって，拡大家族か核家族かのいずれかの形態をとるといえる。全体的な傾向として，居住形態にのみ着目すれば世帯の核家族化が進展しているといえる。これには，一組の夫婦を中核とした核家族世帯を基本とする準州政府の住宅政策と，核家族で世帯を形成したいという住民の選択の両方の要因が深く関与していると考えられる。北西準州のイヌイット全体について同様の指摘が，ロングスドンとセトによってなされている [Logsdon and Seto 1992: 81–82, 85]。

(2) 村の親族関係

1992年当時のペリーベイ村を構成する69の世帯の間の関係を見てみたい。筆者の一人（スチュアート）の聞き取り調査によれば，「伝統」時代にはペリーベイ周辺のネツリック・イヌイットは，もともと3つの異なる拡大家族から出自した人々から構成されていたという。しかし，拡大家族を血縁と婚姻の関係でつながった核家族の集合を指すと考え [Murdock 1949]，村内の世帯主間の関係に着目すれば，現在のペリーベイ村は，10の拡大家族から構成されている。ただし，そのうち4つはもともと1つの拡大家族関係から派生し，別の2つの拡大家族がもともと同じ親から派生しているため，6つの拡大家族から形成されているということもできる。世帯主間の関係は，図1に示す通りである。

カナダ・イヌイット社会では親族のことをイラギート（*ilagiit*）と呼んでいる。イラギートとは，親しい友人から血縁親族までを意味することのある多義的な単語であり，その内容は把握することが難しい [Maxwell 1976; Graburn 1964; Guemple 1979, 1988]。

1950年代末から60年代にかけてペリーベイ村のイヌイットを調査したバリクシは，イラギートとは，「どこへ行っても，いずれは［出身グループに］戻ってきて，食べ物を分かち合い，たがいに助け合い，そして一緒にいる，関係のある人々」のことであると報告している [Balikci 1989: 112]。このイラギートとは，事実上，エゴを中心としたキンドレッド（kindred）のことであり，住居，儀礼，政治や経済の具体的な単位ではない [Balikci 1964: 25; Steenhoven 1962: 52]。一方，このイラギートのメンバーによって具体的な社会集団が形成され，それが共住や経済の単位となる場合，この集団を形成する人々のことをペリーベイ村では，*ilagiit nangminariit*（「正式の親族」）と呼んでいるとバリクシは報告している [Balikci 1989: 112]。バリクシは

表1　ペリーベイ村の世帯構成

1992年9月24日現在

世帯番号	世帯員数	世　帯　構　成
1	6	A=b−c, d, e, f
2	4	A−b/b−C, d (C and b are children of b and b's ex-husband)
3	8	A=b−C, d, E, f, g, H
4	9	A=b−C, d, e, f, g, H, I
5	6	A=b−C, D, e, f
6	11	a−B, C, D, E, F, (g)/B=h−i, j, k
7	8	A=b−(C), (d), (e)/(C)=f−G, h
8	7	A=b−C, d, e, f, G
9	3	A=b/b−D
10	6	A−b−c, d, e, f
11	6	A=b−C, d, E/F (F is A's cousin.)
12	3	a−(B), (c)
13	2	A, b
14	3	A−B/C (C is A's grandson)
15	4	A=B−C, D
16	2	a−b
17	7	A=B−c, D, e, (f), G
18	5	A=B−C, (D), (e)
19	5	A=b−C, D/A, E
20	6	a−B, c, (D), E, (f)
21	4	A=b−C, d
22	6	A=b−C, D, e, F
23	3	A=b−(c)
24	7	A=b−C, d, e, F, G
25	8	A=b−c, d, e/c=F−g, H
26	5	(A)=b−C, D, e
27	7	A=b−C, D, e/F−b, G
28	5	a−b, C, d, (E)
29	6	A=b−(C)/(C)=b−E, F
30	5	A=b−(C), d, E
31	8	(A)=b−c, d, e, f, G, (h)
32	5	A=b−C, d, E
33	5	A=b−C, D/b, E
34	8	A=b−(C), (D), (e), f, (G)/A, h
35	6	A=b−c, D, (e), (F)

36	3	A=b−c
37	9	A=b−c, D, E, (e), G, (H)/c−i
38	3	A=b−c
39	6	A=b−c, D, E, f
40	5	A=b−c, (d), (e)
41	7	A=b−C, D, E, f, (g)
42	4	A=b−C, d
43	6	A=b−C, D, E, f
44	8	A=b−c, d, e, (F), g, H
45	10	A=b−c, D, e, F, (G), (h)/c−I/D=j
46	5	A=b−c, D, E
47	3	A−b, D
48	6	A=b−C, D, E, f
49	5	A=b−c, (d), e
50	8	A=b−c, D, e, F, g, h
51	6	A=b−C, (D), e/C=f
52	7	A=(B), (C)/(B)=d−E, f/(c)=g
53	5	a−b, C/b−E, F
54	4	A=b−c, D
55	6	a−B, c, d, E, (F)
56	7	A=b−C, D, E/C=f/G (G is A's brother's son)
57	6	A=b−C, d, e/F (F is A's brother's son)
58	3	a−(b), (C)
59	5	A=b−C, d, E
60	7	(A)=b−c, D, E, F, (g)
61	3	a−(b), (C)
62	10	A=b−C, D, E, f, (g), H, (i), (j)
63	4	A=b−c/b−D
64	6	A=b−(c), D, E, F
65	5	A=b−C, d/A−e
66	5	A=b−C, D/A, E
67	4	A=b−C/D (D is A's step-brother)
68	7	(A)=b−C, D, E, (f), (g)
69	6	A=b−c, D, (E), (F)

(記号の説明)

＝：婚姻関係　　大文字：男性　　小文字：女性　　－：親子関係

，：兄弟姉妹関係　　/：核家族の区分　　（　）：養子

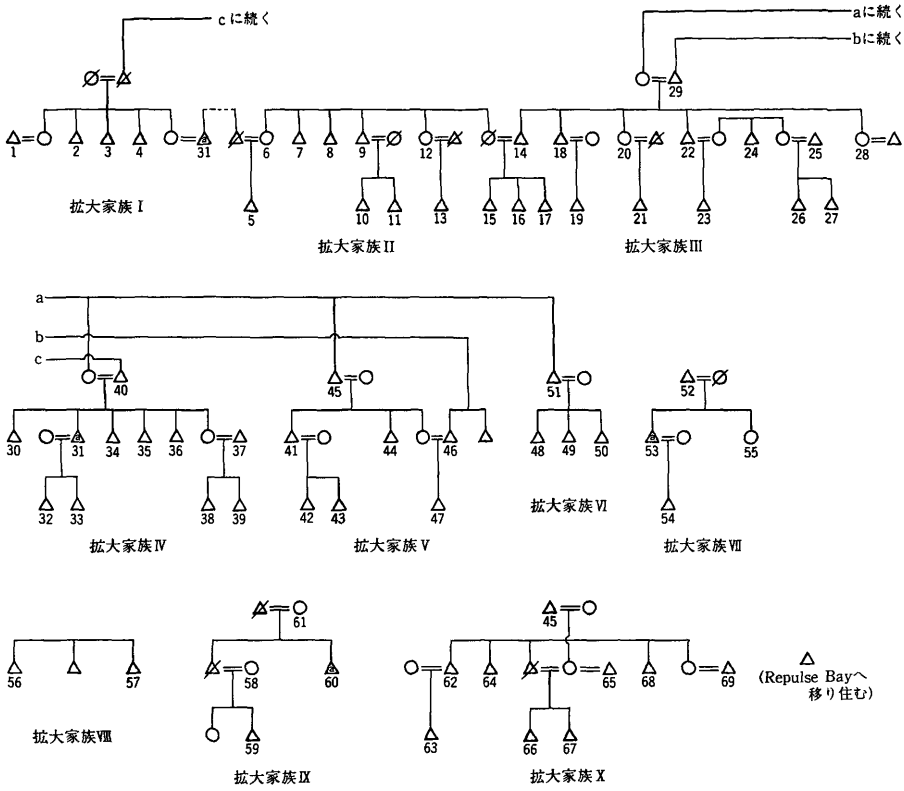


図1　ペリーベイ村の世帯主間の親族関係（1992年9月24日現在，岸上作図）

その集団を「限定イラギート」（一種の kindred-based grouping）と呼んでいるが，この限定イラギートは夏キャンプ集団を形成することがあった。現在のペリーベイ村ではこの用語は使用されていない。筆者の一人（スチュアート）は，インフォーマントの一人から *ilagiimariktut* や *ilagak* という用語が使用されていることを聞き出している。前者は，エゴに近いと認識される者，すなわち祖父母，父母，兄弟姉妹，オイ，メイ，それらに相当する養子縁組の者，そして婚姻による義父母，義兄弟姉妹などを含み，バリクシの限定イラギートに相当すると思われる。後者はより広範囲な親族集団を指し，バリクシのイラギートに相当すると考えられる。

チャントレー・インレット（Chantrey Inlet）付近を主な生活領域としていたネツリック・イヌイットのグループの1つである Utkuhikhalingmiut を調査したブリッグスは，血縁の遠近によって親族を2つに分けていると報告している [Briggs 1968: 8]。すなわち1つは *ilammarigiit*（「真の家族」）であり，もう1つは，*ilammarilluanngniitut*（「真の家族ではない者」）である [Briggs 1968: 8]。ブリッグスによると，

前者は養子を含めたエゴの兄弟姉妹やそれの子供たちからなる拡大家族であるという [BRIGGS 1968: 28]。それは，上記のバリクシの限定イラギートに相当する。

ネツリック・イヌイットが住む領域に隣接するリパルス・ベイ（Repulse Bay）に，1920年にハドソン湾会社[10]の交易所が設置された。このためにネツリック・イヌイットはリパルス・ベイのイヌイットと特に相互交流をするようになった。このリパルス・ベイのイヌイットの親族について調査を行なったマクスウェルは，*ila* に対して *ilammarigiit*（「真の親族」）という用語を指摘し，その範囲は，エゴとその配偶者のマゴまでを含むと報告している [MAXWELL 1976: 44, 62]。これには，血縁関係のない養子も含まれる [MAXWELL 1976: 63]。これも上記のバリクシの限定イラギートに相当する。

ここでイラギートと限定イラギートという用語を整理すると，イラギートとは，エゴからみて一部の姻族を含む拡大家族関係にあるすべての人（キンドレッドの成員）を指すのに対して，限定イラギートとは，拡大家族関係にある人の中でも，同一の場所に住み経済活動などで緊密な協力関係にある人々，すなわち，具体的な社会集団を形成する人々を指す。結果的に，後者はエゴの親，兄弟姉妹，妻と子供たち，マゴ，オジ，オバ，祖父母やイトコの人々であることが多くなる。本論文では，同一の村に住むイラギートのことを拡大家族と呼ぶことにする[11]。現在のペリーベイ村には，10の拡大家族（ただしこれらはまた6つは広義の拡大家族，すなわちイラギート関係をから構成されている）が存在すると考えてよい。

拡大家族Ⅰは兄弟と義理の兄弟の関係を絆としたもので，世帯1，2，3と4の4世帯から構成されている。員数は27名である。

拡大家族Ⅱは兄弟姉妹と親子関係を絆としたもので，世帯5，6，7，8，9，10，11，12，13の9世帯から構成されている。員数は52名である。

拡大家族Ⅲは親子関係と兄弟姉妹関係と姻族関係を絆としており，14，15，16，17，18，19，20，21，22，23，24，25，26，27，28，29の16世帯から構成されている。員数は83名である。

拡大家族Ⅳは，親子関係，兄弟姉妹関係および婚姻関係を絆とし，30，31，32，33，

10）ハドソン湾会社（Hudson's Bay Company）は1670年に設立されたイギリスの特許会社で，当時イギリスの植民地であったカナダにおいて毛皮交易をはじめ，ほとんどの交易を事実上独占していたが，1987年に極北地帯の店をいっさい手放した。

11）正確には，*ilagiit* とは拡大家族関係にある人々のことであり，*ilagimmariit*（スチュアートによる *ilagiimariktut* に相当すると思われる）はその中でもっと狭い範囲の親密な関係にある人々のことである。前者は広義の拡大家族関係にある人々，後者は狭義の拡大家族関係にある人々というふうに呼ぶのが適切である。

34，35，36，37，38，39，40の11世帯から構成されている。員数は63名である。

拡大家族Ⅴは親子関係，兄弟姉妹関係および婚姻関係を絆とし，世帯41，42，43，44，45，46，47の7世帯から構成されている。員数は43名である。

拡大家族Ⅵは親子関係，兄弟姉妹関係を絆とし，世帯48，49，50および51の4世帯から構成されている。員数は25名である。

なお拡大家族Ⅲの29の妻，Ⅳの40の妻，Ⅴの45とⅥの51は兄弟姉妹であり，もともとは一つの拡大家族関係を形成していたことを指摘しておく。

拡大家族Ⅶは親子関係と兄妹関係を中心に52，53，54，55の4世帯から構成されている。員数は22名である。

拡大家族Ⅷは兄弟関係を絆とし，56と57の2世帯から構成されている。員数は13名である。

拡大家族Ⅸは親子関係と兄弟関係を絆とし，58，59，60，61の4世帯より構成されている。員数は18名である。

拡大家族Ⅹは兄弟姉妹関係，親子関係と婚姻関係を絆とし，62，63，64，65，66，67，68，69の8世帯から構成されている。員数は47名である。

以上，10の拡大家族の構成と員数をみてきたが，ここで注目すべき点が1つある。この村にある6ないし10の拡大家族が社会的に独立して存在しているのではなく，相互に婚姻を通して結び付けられている点を忘れてはならない。例えば，拡大家族Ⅱの世帯主の娘5人はそれぞれ，拡大家族Ⅲの17の妻，拡大家族Ⅷの57の妻，拡大家族Ⅳの32の妻，拡大家族Ⅱの10の妻，拡大家族Ⅵの48の妻であり，姉妹を通して複数の拡大家族が関係づけられている。特に，後に述べるように，村内婚が比較的多いので，村の中の関係は拡大家族関係を核とし，複数の姻族関係によって結ばれていると把握すべきである。

(3) 親族呼称の体系

ネツリック・イヌイット社会でもほかのカナダ・イヌイット社会と同様に，名前に基づく親族呼称には独特な用法があり，現在でも行なわれている [岸上　1990b]。ただし，ここでは名前が関与しない場合の親族呼称について述べる。

ネツリック・イヌイットの親族呼称体系については，バリクシ [Balikci　1989: 95–98] やダマス [Damas　1975c] が報告している（表2）。

ネツリックのイトコの呼称に着目すれば，父方，母方をとわずエゴの同性のイトコは *idloq*，エゴの異性のイトコにはエゴの兄弟（*ani*），姉妹（*nuka*）と同じ呼称 *ani*

表 2　親族呼称

	男性エゴ	女性エゴ
（同じ世代）		
兄	*angayoq*	*ani*
弟	*nuka*	*ani*
姉	*naya*	*angayoq*
妹	*naya*	*nuka*
イトコ	異性に対しては姉妹呼称が適用	異性に対しては兄弟呼称が適用
イトコ一般	*idloq*	*idloq*
（一世代上）		
父	*atata*	*atata*
母	*anana*	*anana*
父の兄弟	*akka*	*akka*
父の姉妹	*atsa*	*atsa*
母の兄弟	*anga*	*anga*
母の姉妹	*arnarviq*	*arnarviq*
（二世代上）		
父方祖父	*iktoq*	*iktoq*
父方祖母	*ningio*	*ningio*
母方祖父	*iktoq*	*iktoq*
母方祖母	*ningio*	*ningio*
（一世代下）		
息子	*irnik, utak, nutak*	*irnik, utak, nutak*
娘	*panik*	*panik*
兄弟の子	*kangia*	*anga*
姉妹の子	*uyoroq*	*norrak*
（二世代下）		
マゴ	*irngutak*	*irngutak*

（*Balikci [1989: 95–97] の表記に従った。）

や *nuka* が用いられていた [Balikci 1989: 96–97]。異性のイトコの呼称は，マードックの類型でいうと「エスキモー型」ではなく「ハワイ型」であるといえる [Damas 1969b: 48]。

この呼称体系は次のような特徴をもっている。

1. エゴと同一世代の呼称：兄弟姉妹の呼称は，性別と出生順が先か後かによって分化している。一方，イトコは，同性の場合はイトコ呼称で一括されるのに対し，

異性の場合には兄弟姉妹の呼称が使用される。

2. 上昇1世代の呼称：父母の呼称は，オジ・オバの呼称と異なる。オジとオバの呼称は4つあり，性別と父方・母方の別の2つの区別が呼称に反映されている。
3. 上昇2世代の呼称：祖父母は性別によって呼称が分化している。祖父母の兄弟姉妹は，男性は祖父と女性は祖母と同じ呼称が用いられている。
4. 上昇3世代の呼称：性別に関係なく，世代内で一括した呼称が用いられる。
5. 下降1世代の呼称：エゴの子供は性別によって呼称が分化するが，オイ，メイは，エゴの兄弟の子供か姉妹の子供かというカテゴリーで一括されて呼ばれる。オイ，メイの性別上の区別はない。
6. 下降2世代の呼称：エゴのマゴもエゴの兄弟姉妹のマゴも，性別に関係なく一括した呼称で呼ばれる。
7. 下降3世代の呼称：エゴのマゴの子供は性別に関係なく一括した呼称で呼ばれる。

現代の親族呼称は，イヌイットが村で定住生活を開始した1960年代以前 [Balikci 1989: 95–100] のものと比べるとかなりの変化がみられる。まず，親子間や祖父母・マゴ間を例外とすれば，親族呼称自体があまり日常生活で使用されなくなってきている。我々が，日常よく耳にするのは，*atata*（おとうさん），*anana*（おかあさん），*nutak*（幼児のむすこ），*utak*（少年のむすこ），*irnik*（大人のむすこ），*panik*（むすめ），*ukua*（よめ），*ai*（夫婦の間で「あなた」）や，英語の mum（おかあちゃん），dad（おとうちゃん）などである。これらの親族呼称は親族関係を示す以外に，愛情，信頼や上下関係を含意している。現在でも，親や祖父母を名前で呼び捨てにすることは極めて良くない行為であると考えられている。一方，親や祖父母は，子供やマゴがある程度成長すると相手を名前で呼ぶこともある。

親族呼称に関するもっとも大きな変化は，30歳代以下の人々の間にみられるもので，兄弟姉妹やイトコを，親族呼称よりも名前やニックネームで互いに呼びあうことが多くなっていることである。この背景には，1970年代以降の学校教育やテレビ放送による英語や欧米文化の影響や，多数のイトコが同一の村落で生活しているという状況などがあると思われる。特にイトコの場合には，血のつながっていることを知っていても，親族呼称を用いないばかりか，伝統的にイトコに対してとるべき行動を取らない場合も認められる。イトコ関係が，生得的な所与ではなく，選択できるようになったことを示している。オジやオバに対しても親しい場合には親族呼称で呼ぶが，同じ村落に住むオジやオバでも特に親しくなければ名前で呼ぶことも多くなってきている。

以上から，親族呼称全般に使用範囲が狭まり，使用頻度も低下しているように思われる。もし親族呼称が関係内容を含意するものであるならば，親族呼称の変化は社会関係（特に二者関係）の質的変化を意味することになる。特に，多くの民族誌が報告しているような親族関係における年齢や性別の権威関係の重要性を考慮すれば（例えば Damas [1963] や Burch [1975]），筆者らは，兄弟姉妹関係とイトコ関係がこれまでに大きく変化しており，そしてこれからも変化する可能性があることを指摘しておきたい。

(4) 婚姻と居住形態

ネツリック・イヌイットは第一イトコ婚を好んでいたことが1950年代のフィールド調査で報告されている [Balikci 1963: 91, 1964: 67; Steenhoven 1962: 42, 52) [12]。居住規則は厳格には定められていないが，父方居住や夫方居住の傾向が強かったとされている。

1959～60年にペリーベイ村を調査したバリクシは，当時の人口は120名余りであり，調査時の7件の婚姻は第一イトコ婚であったと報告している [Balikci 1964: 67]。さらに相対的な地理的孤立のために，ペリーベイ村のイヌイットは村内婚の傾向があったと報告している [Balikci 1964: 61]。

一方，ダマスは，第五次チューレ探検隊[13] がネツリック・イヌイットと遭遇した時期には，第一イトコ婚が存在していたことを認めてはいるが [Damas 1972b: 41–42, 1975a: 413]，実際には第一イトコ婚以外にも非親族婚や遠縁の者との婚姻などが行なわれており，その婚姻形態はイトコとの規定婚や選好婚ではないとしている [Damas 1975a: 414]。

では，現代のペリーベイ村の婚姻と居住形態がどのようなものであるかをみよう。現在のペリーベイ村には63組の夫婦が存在する。調査で確認できた限りでは，第一イトコ婚が2組，カテゴリー上のイトコ婚が3組，さらにこれらに遠縁婚2組を加えて計7組（全体の約11.1%）が親族婚であった。ただし，調査でははっきりと確定できなかったが，村内婚の場合は，男女の間に何らかの親族関係が存在する可能性が高く，血縁親族婚の比率は実際はもっと高いと推定しうる。

12）ネツリック・イヌイットの第一イトコ婚の機能分析については，岸上 [1987] を参照されたい。

13）デンマーク人のラスムッセン（Knut Rasmussen）を中心に組織された調査は1906年から1933年にかけてグリーンランド，カナダ，アラスカにおいて10回にわたって実施された。民族学，考古学，地理学，植物学，動物学を網羅して，その成果が10巻の報告書に収められた1921～1924年の第5チューレ調査はもっとも有名である。

表3　夫婦の出身地

夫の出身地	妻の出身地	事例数
Pelly Bay	Pelly Bay	24
Pelly Bay	unidentified	12
Pelly Bay	Gjoa Haven	11
Pelly Bay	Repulse Bay	7
Pelly Bay	Spence Bay (Taloyoak)	4
Pelly Bay	Rankin Inlet	2
Repulse Bay	Pelly Bay	2
Spence Bay (Taloyoak)	Pelly Bay	1

私たちの調査では，現在，村内では第一イトコを含む親族との婚姻を嫌う傾向がみられる。このため，イトコと結婚しようとした青年が親の反対にあうことが実際に起こっているし，自殺にまで至った例が少なくとも2例知られている。

次に，配偶者の選択について村内婚と村外婚を考えてみたい。63組の夫婦につき，夫と妻のそれぞれの出身地を表3に表わした。

この表は，村の外に婚出した男女については何も語らないが，この表からわかるように村内婚は24例あり，村内で配偶者を見つける傾向がある程度みられる。そのほかの事例は，配偶者はペリーベイ村の近隣の村や，かつて航空便のあったリパルス・ベイからペリーベイ村への女性の婚入が多いことを示している。また，この表によるとペリーベイ村の男子は女子よりも結婚後も村に残る傾向がある。通婚圏は，バフィンランド・イヌイットやカリブー・イヌイットの地域まで及んでいる。この表3には現われていないが，コパーマインに婚出した女性もおり，西はコパー・イヌイットの地域まで及んでいる[14]。この通婚圏の拡大は，交通手段の発達や定期航空便の開通と関係している。なお，結婚に関しては，両親の影響力が極めて大きいが，最近では最終的に当事者同士で結婚を決める傾向が顕著になっている。

居住形態であるが，新婚の夫婦はほとんどの場合，いずれかの両親のもとに同居した後に，新居を構える傾向がある。同居先として夫方の両親のところを選ぶ傾向が強い。村外から婚入してきた男性（世帯25）が，妻方居住をしている事例が一つあるが，近い将来に，独立した世帯を構えると思われる。結婚後すぐに新居を構えることもできるが，これは入居可能な空き家があり，かつ家賃を支払うことのできる十分な収入

14）ダマスは，西欧社会と接触する以前のネツリック・イヌイットは同じ社会（tribe）内で結婚することが一般的であり，略奪などの場合を除けばほかのグループとの婚姻はまれであったと考えている。すなわち各イヌイット社会の範囲は，各イヌイット社会の通婚圏とほぼ重なることを指摘している [Damas 1969a: 129, 1975a]。

が何らかのかたちで保障されている場合に限られるといえる。居住形態に，厳格な規範はない。拡大家族関係に力点を置けば，父方ないしは夫方居住といえるが，世帯のみに着目すれば新処居住ということになるといえよう。

(5) 擬似親族関係

ダマスは，親族関係以外のイヌイットの社会関係を擬似親族（quasi-kinship）と自発的パートナー関係（voluntary association）との2つに大別している [Damas 1972b]。擬似親族関係とは，「伝統的な」ネツリック・イヌイット社会の場合，いわゆる「配偶者交換」関係（一種の複婚関係），幼児婚約関係および養子縁組関係を含んでいる。自発的パートナー関係とは，同名者関係やアザラシ肉分配関係などのパートナー関係である。

現在のペリーベイ村では「配偶者交換」は少なくとも表面上はなくなっている。どのような経緯でこの関係が消滅したかは定かではないが，カトリック教会の影響が要因の一つであることは確かである。現在のペリーベイ村のイヌイットは全員がキリスト教信者であり，一夫一婦制を基本としている。

現在20歳代の人たちの中には，子供の時に両親が結婚相手を決めた婚約者がいたという人が存在するが，その婚約が実際の結婚に至ったという事例はほとんどない。幼児の婚約もほとんどなされなくなっている。この背景には，人口の増加や女子嬰児殺し[15] の禁止に伴う男女の人口比の均衡化などの人口的な要因が作用していたと考えられる[16]。婚約者関係は現代の村では減少しているうえに，はっきりと機能している例は皆無に近い。

「配偶者交換」や幼児の婚約はほとんど行なわれなくなったが，養子縁組は現在でも行なわれている。ペリーベイ村の現在のイヌイット人口393名中，養子は53名おり，総人口に占める養子の割合は13%あまりである。この53名の性別による内訳は，男性28名，女性25名であり，男女差はあまりみられない。

次に養子がどの村から取られ，そして誰から取られたか，養父母と養子のもとの関係はどのようなものであったかを簡単にみる。

どの村から養子がとられたかであるが，我々の調査によれば，ペリーベイから24例，

15) ネツリック・イヌイットの女子嬰児殺しについては，岸上 [1988] を参照されたい。
16) コパー・イヌイットの村であるホルマンを研究したコンドンは，幼児婚約や親の取り決めによる婚姻が消滅したのは，両親による子供に対する統制力の低下や宣教師，学校やテレビを通して欧米的な価値観がイヌイット社会に浸透してきたからであろうと指摘している [Condon 1990: 273]。

スペンス・ベイ（Taloyoak）から9例，リパルス・ベイから5例，ジョー・ヘブンから4例，ケンブリッジ・ベイから3例，イヌビクから2例，イエローナイフ1例，データ不足のため確定できなかった5例であった。これらの事例からわかることは，養子縁組の養子の約半数がペリーベイ村の出身である。そのほかの縁組は，スペンス・ベイ，リパルス・ベイ，ジョー・ヘブン，ケンブリッジ・ベイの順になっているが，これらの村はペリーベイ出身者の婚出先とペリーベイ村に婚入してきた男女の出身地であり，通婚圏とほぼ重なっている。このような「伝統」的なネットワークによった養子縁組とは異なり，イヌビクやイエローナイフからの養子は，北西準州社会福祉事務所を通して行なわれた養子縁組である。

では，誰から養子をとったか。エゴ夫婦の息子や娘からの18例がもっとも多く，次いでエゴ夫婦の兄弟姉妹から8例，エゴ夫婦のイトコから4例，非血縁者から3例，遠縁から1例であった。なお残りの16例については，今回の調査で情報を収集することができなかった。判明しているデータから判断すれば，ほとんどの養子縁組は親族間で行なわれていることがわかる。養子に出したりもらったりした理由が，若者夫婦が経済的理由で養育できないこと，子供をもちたいという中高年夫婦の希望，別の村に住んでいるエゴの兄弟姉妹やエゴの子供の子供（エゴのマゴ）を養子にしたいという希望などが主なものである。

収集できたデータに限っていえば，養子と養父母の間にもともとあった関係は，祖父母とマゴの関係が20例，オジ・オバとメイ・オイの関係が12例，非血縁者関係が3例，曽祖父母とヒマゴの関係が1例，遠縁が3例であり，子供は祖父母やオジ・オバのカテゴリーに属する人々によって養子にされていることがわかる。このことは，すでにダマス [Damas 1972b: 50] が指摘しているように，養子縁組によって創り出される社会関係は，多くの場合，もともとあった親族関係を重複や複合化したものである。ペリーベイ村の事例に関する限り，現在の養子縁組は，親族のネットワークの拡大を意図して行なわれているとはいえない。

以上，現在のペリーベイ村では，「配偶者交換」はなく，幼児の許婚はほとんど行なわれておらず，それによって創り出される社会関係は現在なくなっている。一方，養子縁組は現在でも行なわれており，養子縁組関係は存在している。なお村人はこの養子・養父母関係を，血縁関係が存在していなくとも真の親族関係とみなしている。

(6) 自発的パートナー関係

伝統的なネツリック・イヌイット社会やコパー・イヌイット社会では，自発的に形

成されるパートナー関係がいくつか発達していたことが知られている [DAMAS 1972b: 54; BALIKCI 1989: 133–144 など]。ネツリック・イヌイット社会の場合，忌避関係（*ibliriik*），冗談関係（*takullariik* もしくは *aqpiurariik*），愚弄敵対関係（*illuriik*），アザラシ肉分配パートナー（*okpatiga* など），同年齢者関係（*nutaraqatigiik, inuqatigiit* や *nalimagiik*），交易関係（*niuviliriik*），ダンス・パートナー関係（*illuriik*）や同名者関係（*atiriik* や *abbariik*）などが存在したことが知られている[17]。

忌避関係（*ibliriik*）とは，異性の姻族と面と向かって話をしてはならないことや名前を呼んではならないとする関係である。現在では，異性の姻族と気軽に食事をともにしたり，会話をすることは問題ではなくなってきているが，一部では，今なお異性姻族の間に忌避関係を観察することができる。

冗談関係は，もともと親族ではない者の間で形成されていた [DAMAS 1972b: 45] が，現在のペリーベイ村ではこの関係が認められない。ただし，特定の仲の良い友人同士やイトコ同士が冗談をいいあっていることはしばしばみられるが，伝統的な冗談関係と同種のものかどうかは断言できない。

愚弄敵対関係，アザラシ肉分配関係，同年齢者関係，交易者関係やダンス・パートナー関係も現在のペリーベイ村では認められない。アザラシ肉分配関係は，定住生活を開始する以前には，冬キャンプの社会的統合や食料分配のうえで非常に重要な機能を果たしていた [VANDEVELDE 1956, 1976] が，バリクシらによると，ライフルの使用，海氷上のアイスエッジでのアザラシ猟方法の採用，狩猟集団の小規模化などのために，徐々に消滅したとされている [BALIKCI 1964: 72; DAMAS 1975b: 261]。

同名者関係とは，同一人物に由来する名前を共有する者の間や，名前の提供者ともらい手との間で形成される社会関係である [岸上 1990b]。現在でもこの関係は存在するが，パートナー同士が出会った時に冗談をいいあったり，時々プレゼントを交換するなどの社交的な関係であり，特に重要な経済的機能はほとんどなくなっている。しかし，イヌイットの人名には，霊魂が宿っていると信じられており，同名者関係が現在も文化的には重要である。ペリーベイ村の場合，この関係は祖父母とマゴの間で形成されていることが多い [岸上 1990b]。

以上のように自発的なパートナー関係は消滅ないしは弱体化の傾向を示している。この変化は，とくに1960年代以降に形成された経済パタンと居住パタンの変化による

17）愚弄敵対関係，歌のパートナーは，イトコかそれに相当する者として取り扱われるらしい [BALIKCI 1989: 140–141]。愚弄敵対関係とは，公衆の面前でボクシングをしたり，レスリングをするパートナー関係のことである。

ものと推定されるが，その背景はまだ十分に解明されていない。

一方，多少は親族関係とも重なるが，最近になって注目されるのは，友人関係の発達である。この関係は，他人同士（拡大家族関係でない人々）やイトコの間でみられる。この関係が村の中でどのくらい重要な社会・文化的機能を果たしているかはまだ把握していないが，学校教育の導入により，一日の大半を近親者だけとではなく，友人らと過ごすようになってきており，コンドン [CONDON 1987] がホルマン（Holman）村の調査で報告しているのと同じような仲間集団（peer group）の発達がペリーベイ村でも認められる。

5. 狩猟漁撈活動と社会関係

ここでは，現在の生業活動がペリーベイ村ではどのように組織されているかを，いくつかの事例を用いて考えてみる。

ペリーベイ村の狩猟や漁撈のための集団構成や規模は，対象となる獲物の種類や季節によって変化するが，ここでは，春の海氷上および夏の沖合でのアザラシ猟，春と夏のカリブー猟，夏のコケモモづみ，冬のカリブー猟とオオカミ猟，冬のホッキョクグマ猟，そして冬のジャコウウシ猟の集団構成について報告し，分析を加える。

(1) 春の海氷上でのアザラシ猟

海氷が本格的に溶けはじめる6月から7月中旬までの時期には，3〜4月頃に生まれ，6月から回遊しはじめるワモンアザラシの幼獣が狩猟される。雪に覆われている氷上の巣（*nunakraq*）で子供が生まれるが，海氷が溶けさるまで幼獣は巣の近くにいるので，巣の周辺にある呼吸穴（*aglu*）を利用したアザラシ猟が行なわれる。呼吸穴は通常10数箇所あるので，複数のハンターが協力してなるべく多くの穴を見張る。狩猟法はアザラシが呼吸するために穴に現われる時に銛で仕留めるというものである。

筆者の一人（スチュアート）は，1992年の6月21日，7月1日，2日，3日，4日および6日に行なわれたアザラシ猟に参加した。その狩猟編成は，世帯主（22-A），その妻（22-b）と彼らの息子たち（22-C，22-D，22-F と 23-A）および世帯主の弟（29-(C)）とその妻（29-d）と彼らの息子（29-E）が中心であり，何日かは世帯主の姉の家族（20-a，20-B，20-c，20-(D)，20-E）およびその姉の息子夫婦（21-A と 21-b）が加わった。この狩猟には，同一の拡大家族に属する5世帯（世帯22，23，20，21 と 29）の成員が参加したことになる（図2）。

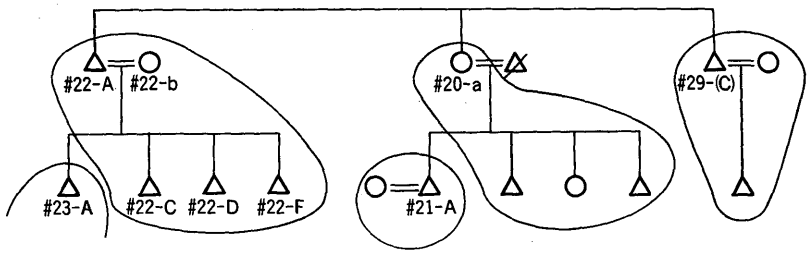


図2　春の海氷上アザラシ猟集団

(2) 夏の沖合アザラシ猟

ペリーベイ村の周辺の海上では，7月中旬から9月中旬まで船外機付きボートを利用したライフルによるアザラシ猟が行なわれる。この狩猟は，ボートで片道3時間以内の範囲でもっとも頻繁に行なわれている。

筆者の一人（岸上）が滞在した世帯21は，父親を若い時に亡くしたため，世帯主21-A が最年長の男子である。現在，彼は独立した世帯を形成し，母親や弟妹とは別の世帯に住んでいる。彼は，1992年の8月29日，8月30日そして9月12日にワモンアザラシとアゴヒゲアザラシを捕りに行った。その狩猟集団構成は，世帯主 21-A と彼の弟（20-B と 20-E）からなる2人ないし3人であった。この内容は，世帯主 21-A が彼の母親のところに住む弟3人のうちの1人か2人を連れて行くという形態であった。

世帯主 25-Aの 場合，息子2人が別々の世帯（26と27）を構えているが，夏のアザラシ猟にはその息子のいずれか1人とともに行くことが多い。また，彼の世帯には娘の婿（25-F）が同居しているが，彼とアザラシ猟に行くことも稀にはある。

状況次第では，ハンターが一人でアザラシ猟に行くこともあるが，2〜3人のグループで行くことが多い。グループで行く場合には，一人がボートを操縦し，同乗者がアザラシを探し出し，ライフルで撃つ場合が一般的である。狩猟のパートナーは，同一の世帯に住む者であるとは限らず，別の世帯に住んでいる親子や兄弟であることが多い。このことは，核家族世帯が夏のアザラシ猟の集団単位であるとは限らないことを示している。

(3) 夏のカリブー猟

夏のカリブー猟は，ペリーベイ村から湾を挟んだ対岸か，村の北東方向から南東方向にかけての内陸で行なうことが多い。前者の場合は，ボートで目的地へ行き，徒歩，

またはボートで運んだ4輪駆動バギーで狩猟場へ行きカリブー猟を行なうが，後者の場合は小型4輪駆動のバギーで狩猟に行く。

後者の場合，一人で行くことが多いようであるが，前者の場合には数名のハンターが同乗できるボートを利用するので，2人ないし3人の狩猟集団を形成する場合が多い。1992年の9月9日と8月28日に世帯主21-Aは，別の世帯に住む彼の弟とカリブー猟に行っている。8月28日には，世帯主21-Aは弟の1人（20-B）と，9月9日には弟2人（21-Eと21-B）と猟に出かけている。

すでに指摘したが，世帯主21-Aには父親がいない。狩猟に出ることのできる父親がいる場合には，父子が狩猟グループを編成するのが一般的である。カリブー猟のリーダーシップは，年長の男性すなわち兄か父親がとることが多い。

(4) 夏のコケモモづみ

1992年の9月12日に，世帯主20-aはコケモモづみに行ったが，この時の参加者は，彼女と同居している息子1人（20-B）と娘2人（20-cと20-(f)）および独立した世帯を形成している息子の嫁（21-b）とその娘（21-f）の合計6名であった。別に世帯を構えている息子（21-A）のカヌーを借り，同居している息子（20-B）が操縦して，コケモモの繁殖地に行った。この集団構成は，世帯を異にするが同一の拡大家族の成員からなっていた。世帯主20-aが，コケモモづみをとりしきっていた（図3）。

(5) 冬のカリブー猟

現代のペリーベイ村のイヌイットは，ライフルやスノーモービルなどを利用することによって，村の周辺で単独のハンターによるカリブーやオオカミの日帰りの狩猟ができるようになった。しかしある程度遠くに行く場合や一泊以上の日程で狩猟に出る場合には，2〜4人の狩猟集団を形成するのが一般的である。

日帰りのカリブー猟の場合，同一の拡大家族に属する親子，兄弟やイトコらが集団を構成する中核となっている。1990年3月31日の世帯主21-Aのカリブー猟は，2組の兄弟（21-Aと20-(D)および19-Aと18-C）で集団を形成し，スノーモービル2台を利用し

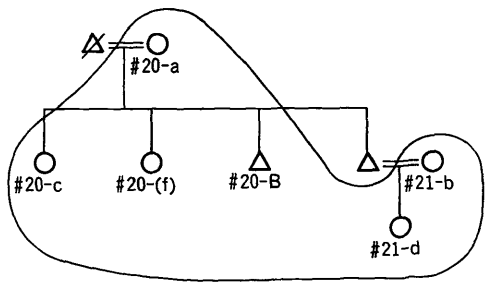


図3　夏のコケモモづみ集団

た。また，同年4月10日の世帯主21-Aのカリブー猟は，21-Aと20-(D)の兄弟に，イトコが1人（18-C）加わって狩猟集団を形成し，スノーモービルを2台使用した。ここで紹介した事例では，狩猟集団は同一の拡大家族に属する人々から形成されていた。

(6) 冬のオオカミ猟

オオカミ猟には，日帰りの狩猟と数日間を要する狩猟の2通りがある。世帯主21-Aは1990年3月17日に日帰りのオオカミ猟に行ったが，この時には彼のイトコ（19-A）と2人でスノーモービル2台を利用して行った。また，オオカミ猟の狩猟パートナーは，世帯主22-Aと世帯主29-Cとの2人や世帯主23-Aと22-Cとの2人のように，別の世帯に属する兄弟である場合もあった。このようにオオカミ猟の狩猟パートナーは，同一の拡大家族に属している人が多い。ただし，一人で日帰りのオオカミ猟に行く場合がもっとも多い。

世帯主22-Aは，1990年4月2日から2泊3日のオオカミ猟に出かけた。この時の集団編成は，彼の息子（22-B），彼の弟（29-C）と彼のオイ（26-A）であった。この場合も異なる世帯に住むが同一の拡大家族に属する成員から狩猟集団が編成されていた。1泊以上の狩猟に出かける場合，中年ないしは初老の熟達したハンターが青年を統率，指導する形で集団が編成されるのが一般的である。

(7) 冬のホッキョクグマ猟

ペリーベイ村からホッキョクグマ猟に行くためには，シンプソン半島の北端周辺まで行くことが多く，2〜7日の日数を要する。ここでは，1989年12月，1990年4月や1991年の冬に行なわれたクマ猟の集団構成について紹介をする。

世帯主21-Aは，1989年12月に，彼のオジ親子（22-Aと22-B）とともに，約5日間のホッキョクグマ猟に行った。この集団は，中年の熟達したハンターが青年（ムスコやオイ）を統率，指導するという形をとっていた。その集団は同一の拡大家族の成員から形成されることが多いといえる。

世帯主25-Aらは，1990年の3月30日から4月2日まで3泊4日のホッキョクグマ猟に出かけた。この場合の集団構成は，世帯主25-Aと26-Aの親子と世帯主25-Aのオイ（23-A，すなわち25-Aの妻の妹の息子）であった。この集団は広義の拡大家族（キンドレッド）に属する人から成り立っていた。この場合も，中年の熟達したハンターが青年（ムスコとオイ）2人を統率，指導する形をとっていた。

また1991年の冬に世帯主68-(A) は世帯主 37-A とホッキョクグマ猟に行き，一頭をしとめている。この2名は，同一の拡大家族に属しているのではないが，同じイヌイット名を共有している関係にある。これは同名者が狩猟集団を形成している事例である。

(8) 冬のジャコウウシ猟

ジャコウウシは現在，ペリーベイ村から約250キロメートル西方にあるジョー・ヘブンの近くにだけ生息するようになり，ジャコウウシ猟を行なうためには約1週間の狩猟旅行を必要とする。1990年4月に親子3名 (45-A, 44-A, 45-D) が2台のスノーモービルでジャコウウシ猟へと向かった。この狩猟集団は親子と兄弟関係から構成されている。なお，この集団のうち年長の息子 (44-A) はすでに独立した世帯を形成している。

(9) 春のカリブー猟

春のカリブーはあまり太っていないが，干し肉 (*mipku*) を作るために5～6月に狩猟が行なわれる。干し肉は基本的に各世帯単位で消費されることが多いため，同じ家屋に住む父子や兄弟が1～2台のスノーモービルで狩猟に行くことが多い。1992年の6月7，10および18日には，世帯主 22-A と息子の 22-F と2人でカリブー猟に行っている。世帯主 22-A は同年6月8日と12日には弟の 29-(C) と息子の 22-F とカリブー猟に行っている。また，別の世帯に住む兄弟 (23-Aと22-D) が同年6月20日にカリブー猟に行っている。これらの事例は，同一の世帯に住む核家族の成員か，異なる世帯に住む拡大家族の成員から狩猟集団が形成されていることを示している。

(10) 分析

近年は技術革新によって，1名や同一世帯に住む父子や兄弟が狩猟に行くことも多くなってきている [Wenzel 1991: 95, 117; スチュアート 1992a: 78, 1995]。しかしここで紹介してきた事例は，狩猟集団が，同一の世帯に住むか，別の世帯に住んでいる親子，兄弟，オジ，オイやイトコなどから編成されていることを示している。また，親族関係のない同名者が狩猟集団を形成する事例もあった。これらの事例は，大半の生業活動が，世帯を単位としてではなく，世帯を横切る拡大家族の成員や特別な関係にある同名者らによって共同でなされていることを示している。

ここで一つ注意しておきたいことがある。筆者らの観察した事例に関する限りは，

狩猟集団が拡大家族のメンバーや同名者から構成されていたが，すべての狩猟集団がそのように構成されているのではない。近年は，特に青年層では，親族関係のない友人同士が狩猟集団を形成する場合もある。特に，若いハンターの狩猟方法や狩猟集団形成についての体系的な研究が必要である。

6. 食物の分配と相互扶助

次に，ペリーベイ村のイヌイット社会でみられる食物分配や相互扶助について報告する。食物分配には，大別すれば2つのレベルがある[18]。第一のレベルは，狩猟や漁撈に参加した者の間での獲物の分配である。第二は，村に持ち帰られた獲物が，食事をともにすることや自発的な贈与を通して分配される場合である。

ネツリック・イヌイットやコパー・イヌイットの場合，冬キャンプを構成する多数のハンターによって冬の呼吸穴を利用したワモンアザラシ猟が行なわれていた頃には，ワモンアザラシの肉の分配について厳格なルールがあり，特定のパートナー間でそのアザラシ肉が分配されていた [VANDEVELDE 1956, 1976; DAMAS 1972a: 227; BALIKCI 1964, 1989]。この特定のパートナー間でのアザラシ肉の分配は，現在のペリーベイ村では確認することができなかった [スチュアート 1995]。また，村全体での共食は年に数回しか行なわれていない。

ここで，第二のレベルの食物分配について報告する。

(1) 世帯主 21-A の昼食と夕食（1992.8.22～9.23）

筆者の一人（岸上）は，1992年の8月22日から同年9月23日までの約1ヵ月間，世帯21の夕飯と昼飯のうちの30事例を記録にとった。この30事例のうち，世帯21の成員のみでとった食事は6回（20%）であった。残りの24回は，ほかの世帯の人間と一緒に食事をしている。もっとも多い事例は，世帯21の世帯員4名が全員で世帯主 21-A の母親（20-a）の世帯へ行き，食事をとる事例であった（図4）。その事例数は全体の70%に相当する21回であった。この21事例中には，その食事に，20-a と 21-A の世帯員以外にも，20-a の妹（28-a），妹の子（28-C），世帯主 20-a の兄（14-A）とそのマゴ（16-b）を含むこともあった。残りの3回（10%）は，世帯21で，母親の世帯に同居している妹や弟が食事をともにしている場合であった。

18) ウェンゼルによると，現在のカナダ・イヌイットの食物分配には，6つのタイプがあるという [WENZEL 1994]。

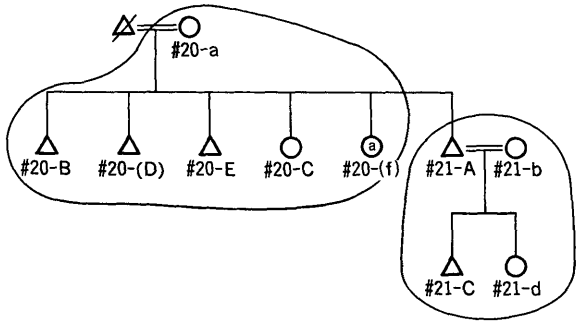


図4　世帯主 #21-A の昼食と夕食の基本パタン

これらの事例は，世帯が食事の単位ではなく，世帯を超えた拡大家族（関係）にある者が食事をともにする傾向を示している。世帯主の親子，兄弟，マゴ以外の者も食事に加わった例が3例あったが，それは世帯主 21-A の母の妹とその息子，世帯主 21-A の母の兄とそのマゴたちであり，すべて世帯主 21-A や彼の母（20-a）と拡大家族関係にある者であった。以上の事例から，食事は核家族世帯を超えた拡大家族の成員が集ってとっていることが示されている。なお，この傾向は，1991年3月中旬から4月中旬にかけての同様の観察によっても支持されていることを指摘しておく [岸上　1991: 7-8]。

(2) 食物の贈与

最近では，ホッキョクイワナやマクタック（*maktaq*：脂肪のついたシロイルカ皮）が金銭で売買されていることも事実である。筆者の一人（岸上）は1990年3月に，村の中で定職に就いている夫婦が，村の狩猟・罠猟師組合からホッキョクイワナを購入するところを見たことがあるし，1992年の9月には，ある日の正午すぎのラジオ放送で，イグルーリク（Iglulik）の女性がマクタックを1ポンド（約450グラム）5ドルで売りたいから，買いたい者は電話するようにと英語で話していたのを聞いたことがある。

しかしながら，筆者らがペリーベイ村で観察した限りでは，食物の無償分配や贈与が今なお拡大家族の成員世帯間で行なわれている。食物の無償分配は，非親族間でもある程度は行なわれているが，拡大家族関係にある者の間ではより頻繁に行なわれているように思う。ここでは5事例を紹介する。

事例1　ホッキョクグマの肉の贈与

1990年4月の時に，世帯主21-Aに彼のイトコ（23-A）が捕ってきたホッキョクグマの肉が10キロほど回ってきた。イトコが祖父母（29-Aと29-b）の世帯にもって行った大量の肉が，その祖父母によってマゴ21-Aや娘20-aのところに再び分配されたものであった（図5）。このようにハンターの拡大家族関係（キンドレッド内で）のネットワークに沿って分配，流通することがもっとも多い。

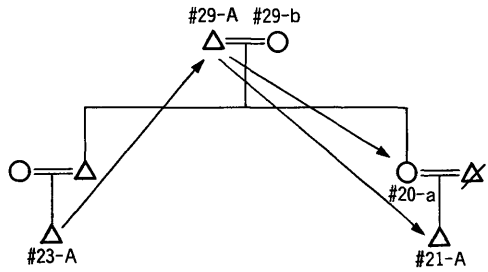


図5　ホッキョクグマ肉の贈与の流れ

事例2　カリブーの肉の贈与

寡婦20-aのところには，独立した世帯を構えた息子が肉をもってくる以外に，彼女の父母（29-Aと29-b）やオジ（母の弟，45-A）のところからカリブーの肉が送られることが何度か観察された。

事例3　アゴヒゲアザラシの肉の贈与

1992年9月13日に，世帯主20-aは兄の息子（オイ，17-A）からアゴヒゲアザラシの肉をもらってきた。

事例4　アゴヒゲアザラシの脂肪

世帯主21-Aの母の兄（オジ，14-A）がアザラシの脂肪を21-Aのところからもらっていった。

事例5　ホッキョクイワナの贈与

現在，村の中で配水車の運転手をしている34-Aは，彼の弟36-Aが大きいホッキョクイワナを捕ってきたので，そのうちの3匹を贈与された。

(3) 仕事の相互扶助

この村の世帯主22-Aは，10人乗りの大型ボートを所有しているが，冬に備えて9月の中旬に，そのボートを陸上にあげることになった。村から牽引のためのブルドーザーを借りるほかに，何人かに助力を求めた。この作業に参加したのは，彼の息子4

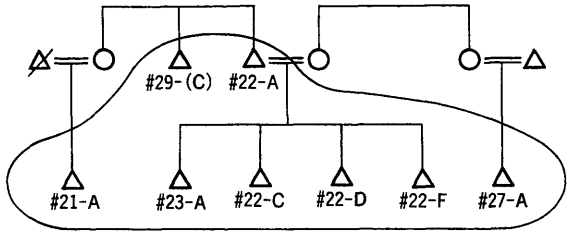


図6　大型ボートの陸揚げ作業の協力関係一例

名（23–A，22–C，22–D，22–F）とオイ2名（21–A，27–A）であった（図6）。大型ボートの所有者はこの作業のために，拡大家族のメンバーから協力をあおいだことになる。

また，世帯主 21–A は，冬に備えて自分の小型ボートを陸上にあげる時に，息子（21–C）と弟3名（20–B，20–(D)，20–E），と弟の親友1名（24–C）に助力を求めた。ただし，この親友はもともとは世帯主 21–A の弟であり，村内の世帯主24–Aのところに養子に出された人物であった。

これらの事例は，親子，オジ・オイ，兄弟など拡大家族関係にある者が，仕事の相互扶助において重要な役割を果たしていることを示している。

(4) 分析

食事は，世帯単位というよりも世帯を超えた拡大家族（限定イラギート）の成員が集って食事をとっているという傾向がみられる。そして食物の贈与については，異なる世帯を形成している限定拡大家族関係にある者の間だけでなく，イトコやオジ・オイを含む広義の拡大家族関係にある者の間で，ホッキョクグマ，カリブー，アザラシの肉やホッキョクイワナのやりとりがみられる。また筆者らが観察した限りでは，村全体での獲物や食物の分配や，拡大家族関係にない者の世帯間や個人間での食物分配や相互扶助は，あまりみられなかった。以上から，食事や食物の贈与や相互扶助は，親子，兄弟，姉妹，マゴのような狭義の拡大家族関係にある者の間でもっとも頻繁に，その次には，オジ・オバ，オイ・メイやイトコを含む広義の拡大家族関係にある者の間で頻繁に行なわれているといえる。経済活動における個人化の進展の結果として食物分配の総量や頻度が低下していることが，多くの研究者によって報告されているが（たとえば Condon [1990: 273]），ペリーベイ村の事例が示すように，拡大家族関係内での食物分配や相互扶助はいまだに行なわれているといえる。

7. 村内政治と拡大家族関係

すでにみてきたように，生業活動や食物の分配では限定拡大家族関係や広義の拡大家族関係が重要な役割を果たしているが，村内政治と拡大家族関係との間にはどのような関係があるのであろうか。

現在のペリーベイ村には，村内の重要な事柄について決定を下したり，意見を取りまとめたりする立場にある人がいる。特に，村の行政や社会生活に係わることに影響力をもつ者としては，村長，村会議員や各委員会の委員長などを挙げることができる。これらの役職は世襲ではなく，村人により投票で選出される。

(1) 村長の選出

村の行政組織の長である村長は，個人的な資質や能力を要求されるが，それだけで村長になることはできない。村長の選出は投票によって行なわれるため，それなりの支持母体をもたなければならないと考えられる。特に，カナダ・イヌイットの村落は多くの場合，ペリーベイ村のように複数の拡大家族集団から形成されているため，村長選出にあたっては拡大家族集団の力関係が大きく作用すると考えられる。

現在の村長は世帯主 48-A であり，拡大家族Ⅵに属している。拡大家族の人口規模の点からみると，Ⅵは 6 番目の規模であり，十分の支持基盤があるとはいえない。むしろ各拡大集団が利害集団の単位であるとするならば，拡大家族Ⅱ，Ⅲ，Ⅳから選出される可能性が高いはずである。ところが実際にはⅥから選出されている。これはどのように理解すべきであろうか。

すでに指摘しているが，拡大家族Ⅲ，Ⅳ，ⅤおよびⅥは，もともと同一の拡大家族に属して，その長はそれぞれ兄弟姉妹である拡大家族集団であり，広義の拡大家族（関係）であるとみることができる。この4つの拡大家族関係に属する成員を単純に合計すると，38世帯の209名（子供を含む）であり，ペリーベイ村のイヌイット人口の55%あまりを占めていることになる。

また，現在の村長の妻は，拡大家族Ⅱの世帯主 12-a の娘であり，姻戚として拡大家族Ⅱと関係があるうえに，その妻の姉妹は拡大家族Ⅲの世帯 17-A の妻や拡大家族Ⅷの 57-A の妻となっており，妻の姉妹を通しても 2 つの拡大家族集団に姻戚関係をもっている。

以上から推定して，村長になるためには，個人の資質や能力が重要であるが，それ

表4　拡大家族：規模と村議会議員の関係

拡大家族	規模	世帯数	議員数
Ⅰ	27	4	0
Ⅱ	52	9	1
Ⅲ	83	16	0
Ⅳ	63	11	2
Ⅴ	43	7	1
Ⅵ	25	4	2
Ⅶ	22	4	0
Ⅷ	13	2	0
Ⅸ	18	4	1
Ⅹ	47	8	1
計	393	69	8

以外にも，拡大家族関係や姻戚関係からの支援が必要であると考えられる。すなわち，社会関係に着目して村長の選出を考えれば，それは拡大家族集団間の政治力学と相関関係があると思う[19]。

(2) 村議会議員の選出

村議会は，村の社会生活に関わる事項を審議して決定することや，準州や連邦政府と交渉するなど，村の中でもっとも重要な政治組織である。しかし，村会議員という役職についての村人の評価は一様ではない。ある人は，議員とは退屈な仕事であり，報酬も少ないためあまりやりたくないと考えている。一方，議員の仕事は報酬に関係なく重要であると考えている人もいる。いずれにせよ，18歳以上の村人の選挙によって村会議員8名が選出されるという点で，議員は村民を代表する役職といえる。また，議員の互選によって副村長が選出される。過去2期の村会議員の構成について興味深いのは，女性と20歳代の若者がそれぞれ1名ずつ選出されていることと，3名の人物（7-A，60-A と 62-A）が繰り返し選出されている点である。議員と出身拡大家族およびその規模との関係は，表4に示す通りである。

この分布をみると，必ずしも議員の選出と拡大家族集団の規模との間には相関関係がないようにみえる。例えば，拡大家族Ⅵは25名の成員しかもたないのに，2名の議員をもつ。他方，拡大家族Ⅲは77名の成員をもつのに，議員は一人もいない。

19）リバルス・ベイ出身で，ベリーベイ村に移り住んだ男性（世帯主 25-A）が，2期村長をしている。この場合は，個人の人物的資質などの理由によって村長に選出されたことを示している。

ところが，候補者の条件や特徴および各拡大家族の現状を勘案すると，この議員の分布はある程度説明できる。再び拡大家族Ⅲ，Ⅳ，ⅤとⅥを広義の拡大家族と考え，その中で誰が議員にふさわしいかを考慮すれば，全体で209名の中から5名の議員が選出されており，ほぼ村全体の人口に比例した選出となっている。

一方，拡大家族関係Ⅰの4人の世帯主はすべて，20歳代から30歳代であり，立候補していない。拡大家族Ⅶには準州議員が1人いるが，現在，彼と彼の妻以外の拡大家族構成員は，立候補するに十分な条件を満たしていないか，立候補する意志がない。拡大家族Ⅷの2人の世帯主は，1人が村役場の要職につき，もう1人もペリーベイ村が属するキティクミュート（Kitikmeot）学区の教育委員長を行なっており，議員になる意志がない。

以上のことを考慮すると，村会議員の選出もある程度，拡大家族関係の規模と正の相関関係があると考えられる。

(3) 委員会や組合の長の選出

現在のペリーベイ村には，リクリエーション委員会（Recreation Committee），狩猟・罠猟師組合（Hunters and Trappers Association），厚生委員会（Health Committee），住宅組合（Housing Association），教育委員会（Community Educational Council），生活協同組合（Koomiut Co-operative），婦人会（Woman's Group），教会理事会（Parish Council），青少年会（Youth Group），人命救助委員会（Search and Rescue Committee）とラジオ協会（Radio Society）の11の社会集団がある。これらの集団は村人の生活に関わっており，その委員は投票によって選出される。委員会や組合の長は，選出された委員の中から互選によって選ばれるが，通常は人格や資質の優れた人物が選ばれる傾向がある。11人の委員長のうち2人は，村会議員の役職を兼任している。

委員会や組合の長と拡大家族との関係を表5にまとめた。

この表からわかるように，ほぼすべての拡大家族集団から委員長なり組合長なりが選出されている。これらの委員会や組合の村における重要性は等しくないが，うまく各家族集団の間でほぼ平等に委員長なり組合長のポジションを配分している。ここで興味深いのは，拡大家族Ⅰは，村会議員は一人も出していないが，リクリエーション委員会，生協や教会の理事会などに長を出している。また，拡大家族ⅦとⅨからは1名も委員長や組合長が出ていないが，これはこれらの家族集団における人材不足や規模が小さいという現状などに起因しているといえよう。一方，規模は小さいが，経験

表5　拡大家族と委員長，組合長との関係

拡大家族	規模（世帯数）	委員会名	委員長の数
Ⅰ	27名（4世帯）	リクリエーション委員会，生協，教会理事会	3名
Ⅱ	52名（9世帯）	厚生委員会	1名
Ⅲ	83名（15世帯）	人命救助委員会	1名
Ⅳ	63名（11世帯）	婦人会，ラジオ協会	2名
Ⅴ	43名（7世帯）	青少年会	1名
Ⅵ	25名（4世帯）	教育委員会	1名
Ⅶ	22名（4世帯）	なし	0名
Ⅷ	13名（2世帯）	住宅組合	1名
Ⅸ	18名（4世帯）	なし	0名
Ⅹ	47名（8世帯）	狩猟・罠猟師組合	1名

や能力のある人材を有する拡大家族ⅥとⅧは，教育長と住宅組合長をそれぞれ出している。

(4) 分析

村長，村会議員，委員長や組合長の選出と拡大家族の規模との関係をまとめてきたが，これらの選出と政治単位（支持母体）としての拡大家族（限定イラギート）との間には，一見したところ，明確な正の相関関係があるとは言い難い。しかし，現在の人材の分布，行政職や準州議員の職の分布，そして広義の拡大家族関係を考慮に入れると，村内の力関係は拡大家族集団の規模を反映していると考える。ペリーベイ村のように400名程度の村では，村人同士がみな面識があり，それぞれの資質や能力についてある程度は知っているため，個人的に優れた資質や能力をもつ人物が村内政治で重要な役割を果たす可能性も否定できないが，筆者らは，ペリーベイ村の村内政治は村内の拡大家族間の力の均衡の上に成り立っていると考える。

これまでは，拡大家族間の力関係について述べてきたが，一つ付け加えておきたい。村長，村会議員，各種委員会や組合の長は，村の表向きの政治を動かす人々であるが，もう一つの政治力が存在している。それは，各拡大家族集団の長老たち（女性を含む）の成員に対する影響力である。例えば，ペリーベイ村では，村に酒を持ち込んだり飲酒する自由を認めるかどうかについての村人の投票行動に，拡大家族集団の長老の意見がかなりの影響力を与えていた。1990年の住民投票の結果，長老たちが望んできたように，ペリーベイ村は禁酒の方針をとり続けることになった。

公職の選挙や委員会内での委員長の選出に関して，拡大家族の間の政治的かけひき

の究明，姻族関係，友人関係，個人の人物評価や能力などの要因が，どのように村人の意志決定に作用しているかは，今後の課題としたい。

8. 変化と持続

近年，イヌイットやユッピックに関する文化人類学的な研究は転機を迎えている。ジョルゲンセン [JORGENSEN 1990] やクラウスナーら [KLAUSNER and FOULKS 1982] の研究では，一つの地域が研究対象となり，広域な地域で起こった変化に研究の焦点を合わせている。この変化は，物財，住宅条件，現金収入，アルコールの消費量や世帯の家族構成など，統計的にも明示できる変化である。一方，フィエナップ＝リオーダン [FIENUP-RIORDAN 1983] やナタル [NUTTALL 1992] の研究は，表面上の文化変容を認めながらも，その変化は構造的な変化ではなく，むしろ文化や社会の通時的な持続性を強調している[20]。

1960年代の極北での文化人類学研究は，おおむね急激な文化変化を強調するものであった。例えば，1950年代末から1960年代の初めにかけて，ペリーベイ村で調査を行なったバリクシは，冬の呼吸穴を利用したアザラシ猟や夏のカリブー猟が，ライフルの使用や狩猟方法の変化のために，小集団化ないしは個人化し，ペリーベイ村のイヌイットは拡大家族内や拡大家族間でも食物分配を行なわなくなり，核家族が一年を通して基本的な経済単位となりつつあると報告している [BALIKCI 1964: 72–75] [21]。

1970年代以降，研究者の間での理論的志向の変化や極北先住民をめぐる政治的な状況の変化のため，村落の社会構造や生活様式に焦点をあてた文化人類学研究は，カナダでほとんど行なわれることがなかった。多くの研究者は，目に見える変化や統計で表わすことのできる変化に着目し，カナダ・イヌイット社会は，特に第二次世界大戦後，定住化，世界経済システムへの接合（articulation），国家の介入などの変化の要因のために大きく変化したと考えている。カナダ・イヌイット社会の変化についての共通認識を要約すれば，次のようになろう。セトルメント・パターンが，季節ごとにキャンプ集団の規模を変化させながら，特定の地域内で移動を繰り返すバンド型社会から，規模のより大きい定住村落社会へ移行した。経済活動も，生業を中心とした経

20）イヌイットやユッピックの社会変動研究についての北米の研究動向と現状については，岸上 [1994] を参照されたい。

21）1960年代の半ばにネツリック・イヌイットを調査したダマスは，ジョー・ヘブンなどでは，バリクシ [BALIKCI 1964] がペリーベイ村について報告しているのとは異なり，拡大家族内での食物分配は引き続き実践されていたと報告している [DAMAS 1976: 143]。

済から生業・貨幣混交経済へと移行し，それに伴い，社会構造の上でも拡大家族の社会経済的機能が低下し，核家族の社会経済的機能が顕在化してきた。

以上述べた変化は，一つの傾向として否定することはできないが，ペリーベイ村の生業や社会関係の現状を吟味すれば，社会変化の中にも構造的持続性を見出すことができる [岸上　1991; スチュアート　1992a, 1995]。今回の研究では，現在のペリーベイ村では，核家族は政府の住宅政策により世帯の単位となってきているが，生業集団の組織化，食物分配や相互扶助などの点では，核家族や世帯を超えた拡大家族関係が依然として機能を果たしていることが明らかになった。これは，社会の構造原理が，定住化する以前と同じく拡大家族関係を核としていることを示しており，社会の構造的な持続性を意味していると考える。

9. 結　　語

本稿では，現在のペリーベイ村の社会関係を記述するとともに，社会生活における拡大家族関係の機能に考察を加えた。結論を要約すれば，次のようになる。

①1992年9月20日時点におけるペリーベイ村のイヌイットの人口は，393名であり，世帯総数は69である。一世帯平均の構成員数は，5.7名である。

②世帯構成は，核家族世帯が60世帯（87%）と拡大家族世帯が9世帯（13%）である。

③村の中の社会関係を拡大家族関係からみると，ペリーベイ村は現在，6〜10の拡大家族（関係）から構成されている（図1）。

④婚姻は，イトコ婚も何組か存在しているが，最近，親族婚を避ける傾向が認められる。また，村内婚が比較的多い。

⑤居住形態は夫方ないし父方居住が主であるが，若者夫婦は条件が整えば新居を構える傾向がある。

⑥擬似親族関係やパートナー関係で，現在ペリーベイ村で観察できるのは，養子関係，同名者関係と異性姻族間の忌避関係ぐらいのものである。養子関係は，イヌイットは真の親子関係とみなしている。また各種パートナー関係は消滅したが，イトコ関係や友人関係がそのかわりに重要になってきている。

⑦ライフル，スノーモービルや原動機付ボートなどの利用により，狩猟・漁撈集団の規模は小さくなり，核家族世帯内で生業のための集団を形成することができるようになった。しかしながら，夏のアザラシ猟，カリブー猟や冬のカリブー猟，オオカミ

猟，ホッキョクグマ猟やジャコウウシ猟などの狩猟集団やコケモモづみの集団は，親子，兄弟，イトコ，オジ・オイ関係を中心に，別の世帯に住む同一の拡大家族に属している人々から構成されていることが多い。

⑧食物の分配や相互扶助を社会関係の観点からみると，世帯を超えた拡大家族関係が依然として重要な社会関係として機能している。

⑨村内政治を社会関係の観点からみると，役職者の選出と拡大家族関係の規模との間にはっきりした相関関係があるとは断言できないが，そうした傾向が存在する可能性が高い。今後，より綿密な調査と分析が必要である。

⑩狩猟集団構成，食物分配および相互扶助における社会関係を吟味した結果，現在のペリーベイ村では，世帯や核家族という単位が社会経済的な機能の上で顕在化してきた一方，拡大家族関係が社会生活のいろいろな側面で機能しているといえる。

⑪以上から，急激な社会変化にもかかわらず，社会関係における拡大家族関係の重要性とその通時的持続性が判明した。すなわち，現代のネツリック・イヌイットは，変化していく社会の中で，拡大家族関係という社会関係を利用しつつ，社会生活を組織しているといえる[22]。

謝　　辞

本研究はペリーベイ研究プロジェクトの一部である。本研究を実施するにあたり，ペリーベイ村のイヌイットの方々から多大の協力を得た。また，文部省より平成4年度国際学術研究の助成（スチュアートヘンリ代表，課題番号04041009）を得た。両者に対し，記して感謝の意を表わす次第である。ペリーベイ村では，特に次の方々にお世話になった：Simon Inuksaq, Josie Angutinguiniq, Martha Kutjuutiqu, Paul Kutjuutiqu と Levi Illuituq, Jocelino Sigguk とその妻 Adele Sigguk。

文　　献

BALIKCI, A.
1963 Le Regime Matrimonial des Esquimaux Netsilik. *L'homme* 3(3): 88–101.
1964 *Development of Basic Socioeconomic Units in Two Eskimo Communities*. Ottawa, National Museums of Canada, Bulletin 202.
1984 Netsilik. In D. Damas (ed.), *Handbook of North American Indians*, Vol. 5, *Arctic*, Washington D.C.: Smithsonian Institution, pp. 415–430.
1989 *The Netsilik Eskimo* (2nd ed.). Prospect Heights, Il: Waveland Press.
BOAS, F.

22) 本論で述べた社会関係を例証する事例を1994年度の調査でも収集することができたが，それらの例はここで得た結論に合致するものであるので，省略する。

1888 *The Central Eskimo*. 6th Annual Report of the Bureau of American Ethnology, Washington,D.C.: Government Printing Office.

BRIGGS, J.

1968 *Utkuhikhalingmiut: Eskimo Emotional Expression*. Ottawa: Northern Science Research Group, Dept. of Indian Affairs and Northern Development.

BURCH, E. S. Jr.

1975 *Eskimo Kinsmen: Changing Family Relationships in Northwest Alaska*. St. Paul, MI: West Publishing Co.

CHANCE, N.

1984 Alaska Eskimo Modernization. In D. Damas (ed.), *Handbook of North American Indians*, Vol. 5, *Arctic*, Washington, D.C.: Smithsonian Institution, pp. 646–656.

CONDON, R. G.

1983 *Inuit Behavior and Seasonal Change in the Canadian Arctic*. Ann Arbor: UMI Research Press.

1987 *Inuit Youth: Growth and Change in the Canadian Arctic*. New Brunswick: Rutgers University Press.

1990 The Rise of Adolescence: Social Change and Life Stage Dilemmas in the Central Canadian Arctic. *Human Organization* 49(3): 266–279.

DAMAS, D.

1963 *Igluligmiut Kinship and Local Groupings: A Structural Approach*. Ottawa, National Museums of Canada, Bulletin 196.

1969a Characteristics of Central Eskimo Band Structure. In D. Damas (ed.), *Contributions to Anthropology: Band Societies*, Ottawa, National Museums of Canada, Bulletin 228, pp. 116–141.

1969b Environment, History, and Central Eskimo Society. In *Contributions to Anthropology: Ecological Essays*, Ottawa, National Museums of Canada, Bulletin 230, pp. 40–64.

1972a Central Eskimo Systems of Food Sharing. *Ethnology* 11(3): 220–240.

1972b The Structure of Central Eskimo Associations. In L. Guemple (ed.), *Alliance in Eskimo Society*, Proceedings of the American Ethnological Society, 1971, Supplement, Seattle: The University of Washington Press, pp. 40–55.

1975a Demographic Aspects of Central Eskimo Marriage Practices. *American Ethnologist* 2: 409–418.

1975b Social Anthropology of the Central Eskimo. *Canadian Review of Sociology and Anthropology* 12(3): 252–266.

1975c Three Kinship Systems from the Central Arctic. *Arctic Anthropology* 12(1): 10–30.

1976 The Problem of the Eskimo Family. In I. Ishwaran (ed.), *The Canadian Family* (revised), Toronto: Holt, Rinehart and Winston, pp. 120–144.

FIENUP-RIORDAN, A.

1983 *The Nelson Island Eskimo*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.

FREEMAN, M. M. R.

1984 Contemporary Inuit Exploitation of the Sea-Ice Environment. In P. Wilkinson (ed.), *Sikumiut: The People Who Use the Sea-Ice*, Ottawa: Canadian Arctic Resources Committee, pp. 73–96.

1988 Tradition and Change: Problem and Persistence in the Inuit Diet. In I. de Garine and G. A. Harrison (eds.), *Coping with Uncertainty in Food Supply*, Oxford: Claredon Press, pp. 150–169.

FREEMAN, M. M. R. (ed.)

1976 *Report: Inuit Land Use and Occupancy Project*, 3 vols. Ottawa: Dept. of Indian and Northern Affairs.

GIDDINGS, J. L.

1952 Observations on the "Eskimo Type" of Kinship and Social Structure. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 1: 5–10.

GRABURN, N. H. H.
1964 *Taqaqmiut Eskimo Kinship Terminology*. Ottawa: Northern Coordination and Research Centre, Dept. of Northern Affairs and National Resources, N. C. R. C. 64-1.

GUEMPLE, L.
1979 *Inuit Adoption*. Canadian Ethnological Service Paper No. 47, Ottawa: National Museums of Canada.
1988 Teaching Social Relations to Inuit Children. In D. Riches, T. Ingold and J. Woodburn (eds.), *Hunters and Gatherers: Property, Power and Ideology*, Vol. 2, London: Berg Publishers, pp. 131–149.

HEINRICH, A. C.
1963 Eskimo Type Kinship and Eskimo Kinship: An Evaluation and a Provisional Model for Presenting Data pertaining to Inupiaq Kinship Systems. Ph. D. Thesis, University of Washington.

HUGHES, G.
1958 An Eskimo Deviant from the "Eskimo Type of Social Organization". *American Anthropologist* 60: 1140–1147.

JORGENSEN, J. G.
1990 *Oil Age Eskimos*. Berkeley: University of California Press.

KISHIGAMI, N. (岸上伸啓)
1987 「伝統ネツリク・イヌイット社会における第一イトコ選好婚について」『社会学年誌』28: 97–112　早稲田大学社会学会。
1988 「伝統イヌイット社会における女子嬰児殺しに関する諸説の紹介と検討」『民族学研究』53(2): 206–213　日本民族学会。
1990a「イヌイット社会人類学の諸問題」『史観』122: 73–91　早稲田大学史学会。
1990b「ネツリク・イヌイットの人名，命名法および同名者関係についての覚え書き」『北奥古代文化』20: 45–52　北奥古代文化研究会。
1991 「カナダ国北西準州ベリーベイ村におけるネツリク・イヌイットの拡大家族について」『北海道教育大学紀要　一部B社会科学編』42(1): 1–12。
1994 「北米におけるイヌイットおよびユッピックに関する文化人類学的研究の最近の動向と現状について——1984年から1993年にかけて」『人文論究』58: 53–105　函館人文学会（北海道教育大学函館校）。

KLAUSNER, S. Z. and E. F. FOULKS
1982 *Eskimo Capitalists: Oil, Politics, and Alcohol*. New Jersey: Allanheld, Osmun Publishers.

LOGSDON, H. and D. SETO
1992 Housing and Northern Lifestyles: An Historical Overview. In R. Riewe and J. Oakes (eds.), *Human Ecology: Issues in the North, Occasional Publication Series 30*, Edmonton: Canadian Circumpolar Institute and Faculty of Home Economics.

MAUSS, M. (モース)
1906(1981) 『エスキモー社会』宮本卓也訳　未来社。(Essai sur les Variations Saisonnières des Sociétés Eskimos, Étude de Morophologie Sociale. *Anee Sociologique* 4(1): 39–132)

MAXWELL, J.
1976 *The Conceptualization of Kinship in an Eskimo Community: Repulse Bay, N.W.T.* Part of Project Report submitted to National Museum of Man, Manuscript.

MURDOCK, G. P.
1949 *Social Structure*. New York: Macmillan.

NUTTALL, M.
1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community and Development in Northwest Greenland*. Toronto: University of Toronto Press.

RASMUSSEN, K.
1931 *The Netsilik Eskimos: Social Life and Spiritual Culture*. Report of the Fifth Thule Expedition 1921–1924, Vol. 8, Copenhagen: Nordisk Forlag.

SMITH, E. A.
1984 Approaches to Inuit Socioecology. *Etudes/Inuit/Studies* 8(1): 65–87.
1991 *Inujjuamiut Foraging Strategies: Evolutionary Ecology of an Arctic Hunting Economy*. New York: Aldine de Gryter.

SPIER, L.
1925 *The Distribution of Kinship Systems in North America*. University of Washington Press Publications in Anthropology 1, pp. 69–88.

STEENHOVEN, G. Van den
1962 *Leadership and Law among the Eskimos of the Keewatin District, Northwest Territories*. Rijswjik: Excelsior.

STEWART, H.（スチュアートヘンリ）
1992a「定住と生業——ネツリック・イヌイットの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」北海道立北方民族博物館編『定住と移動』（第6回北方民族文化シンポジウム報告）網走：財団法人北方文化振興協会，pp. 75–85。
1992b「ネツリック・イヌイットの漁撈——夏の築漁を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1: 31–52。
1993a「ネツリック・イヌイット社会における春の生業——5～6月のカリブー猟と漁撈を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2: 13–36。
1993b「イヌイットか，エスキモーか——民族呼称の問題」『民族学研究』58(1): 85–88。
1995「現代ネツリック・イヌイット社会における生業活動——生存から文化的サバイバルへ」第9回北方民族文化シンポジウム，北方民族博物館（網走），（印刷中）。

VANDEVELDE, F.
1956 Rules for Sharing the Seal Amongst the Arviligjuarmiut Eskimo. *Eskimo* 41: 3–6.
1976 Seal Sharing Partnerships among the Pelly Bay Inuit. In M.M.R. Freeman (ed.), *Report: Inuit Land Use and Occupancy Project* 2: 187–191.

WENZEL, G.
1981 *Clyde Inuit Adaptation and Ecology: The Organization of Subsistence*. Ottawa, National Museums of Man, Canadian Ethnological Service Paper, No. 77.
1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.
1994 Ningiqtuq: Inuit Subsistence as a Social Relational Complex. Paper read at the 9th Inuit Studies Conference, Arctic College, Nunatta Campus, Iqaluit, NWT., Canada, 13 June 1994.